

いか、外の事は兎も角、これが一番に驚くンだよ」

「よからう、さアそろく我々の世界で、日が暮れかかつて来たぜ、出かけようか、しかし一時に出かけて途中、もし猫にでも目ツかると大變だ」

「なアに心配するな、これだけ揃って居りやア猫の一疋ぐらゐ、窮鼠にならなくても大丈夫だ、乃公なンの先祖は頼豪阿闍梨でさへ宥めぬいたぢやアないか、しツかり仕ろ」

蚊の文句

うす聞き樹木の蔭、竹藪の中、泥溝の底より勢揃ひせし一團の蚊軍、あまり稼いで效のな
い夏の午過ぎ、塀と倉との間に人しれぬ會議を開けり、

去年の夏より秋を経て来た越年の老功、わざと遠くより縞の脚絆を穿いて来た特志者あ

りやうく近ごろ湧いて出た青年あり、

「さア今年も皆、大に活動しなければならぬよ、うかく蚤に負けるやうぢやア折角、
かうして我々の湧いて出た甲斐がない、人間の方が能く知ッてるぜ、ぼうふらや蚊にな
るまでの浮き沈み」

「しかし君、蚤の方は寝ても起きても人間の身體を仕居にしてるンだもの、外から飛んで
行く我々と違つて、よほど稼ぐに樂だよ」

「その代り手探りにでも捻り殺されるぢやアないか、自由自在に飛べる我々の方で、びし
やりと遣られる奴は、まぬけの骨頂で、これで宜いといふ分量を知らないからだ、まッ
赤に飛べないほど吸ッて、ぼとく壘の上へ血を溢すやうな事は、すべて舊時代の甚だ
進歩しない下手な藝だ、いやしくも今日の新思想を抱いたものは、なるべく人間の手の

届かないところを覗つて、加之も機敏に吸つて、機敏に遁げるんだ」

「なアに皆、その覺悟で遣るんだがね、しかし吸へる時には儲、誰だつて、さう急に退けないもんだよ、第一また近來は昔の風流氣を帯びた生優しい蚊遣火と違つて、除蟲菊とか何とか、やけに手厳しい嘴の引ン曲るやうなのを煽られるから、つい吸へる時に充分吸つて置かうとするのさ、自然の人情ぢやアないか、いや、蚊情ぢやアないか」

「そこだよ、舊時代の藝だといふが、ぼたく／＼疊の上へ血を溢すほど思ふ存分に吸つた上叩き潰されるのは君まだ宜い部だよ、をり／＼人間め、だまし討を仕やアがるからね、味も何も分らないうちに危い事がある、恥をいふやうだが現に今朝の晩方だ、馬鹿に早起して褻衣のまゝ朝顔の開くのを縁先で見てる奴があるから、こゝぞと覗つて、ぶんともいはず、そつと乃公が左の手の柔かさうなところを遣りかけた、すると野郎、考へ

て居たんだね、きゆうつと俄に皮を引ツ張りやがツて、さア毛穴へ入れた嘴が抜けな、や、こいつ一番かゝつたと思つて、一所懸命に藻掻いてるのを、面白さうに見物しながら、おい汝、これを見ると嘴アを振返つた途端に、ちよいと毛穴が弛んだから、首尾よく遁げたが、足を一本とられて嘴のポンプを折つて仕舞つた、残念だが當分まア休業だうか／＼出来ないぜ、つまらない事を嬉しがつてる閑暇な人間が随分あるからね、人間の方ぢやア、つまらなくツても、此方は生命がけだ」

「ある／＼、その術は誰でも、ちよい／＼食ふよ」

「ちよい／＼食ツちやア困るね、なるべく氣を付けて、お互に食はない用心するが宜い」なるべく用心はするが、あまり美味いと、つい思はず我を忘れるもんだ、もし萬一、どうにも飛べないほど吸つた時に、助かる工夫のないもんだらうか」

「逆も無効だね、無効は無効だが九死に一生を得る謀策は、まづ何か白いものを見付けてその上へ遁げるんだな、人間といふ奴、大きな圖體をしてる割合に膽ツ玉の小さい者だからね、まツ赤に尻が膨れて今にも血が出さうになれば、急に疊の上で殺さないよ、十人が九人まで暫く呆れて見送ッてるもんだ、その間に巧く白いものへ上ると猶更ら殺さない、もし床の間でも近けりやア、いくら苦しくツても無理に這ひ上ッて大切な掛物の中央へ止まるのさ、ね、さア斯うなると人間め、ますく手が出せない、其うち此方の腹工合が宜くなッて身が軽くなりやア、もう占めたもんだ、御馳走様といふ調子で、ぶらんと遁げられるぢやアないか」

「面白い、面白い」

「いや、そんな際どい藝を面白がッては大變だ、ちやうど今ごろ人間どもの晝寢をする最

中だから、めい／＼いづれも忙がしい中を今日こゝへ諸君に来て貰ッたのは、及ぶかぎり危険を避けて大に遺憾なく發展しようといふ、それが第一の主意で、九死に一生の窮策を研究するためでない、どうすれば今年の我々は、無事に身を保ッて充分に愉快に目的を達せられるでせう、誰か名論はありませんか」

「地廻りの諸君を差置いて、甚だ潜越の至りですが、僕に多少の意があります」

「はゝア、流石は綺の脚絆を穿いて、わざ／＼遠くから來られるくらゐだから、定めし立派な名論卓説があるでせう、全體、どういふ意見です」

「僕は元來、旅行が好きで、過日も或人間の夜汽車で京都まで行く奴へ新橋から附いて往ッて、また直ぐ京都から來る奴に附いて歸りましたが、考へて見ると舊來の蚊遣火以外舊來の蚊帳以外、除蟲菊やら泥溝掃除やらで、大に我々の生存を害せらるゝ今日は、最

も安全に最も愉快に最も充分に血を吸へるのは汽車の中に限りますよ、どうせ夏のこつてすから、いづれも團扇や扇を持つて居ますが、その動く毎に飛んで避けるから、團扇と扇は敢て恐るゝに足らない、まして旅行中の人間は、疲勞が早くつて、なか／＼さうは手の方が續きません、つまり半眠半醒で、うと／＼とするとところを、ちく／＼とやる工合、たまりませんね、ころ／＼家の中で寢轉んでる奴とは、どういふもんか、よほど味が違ひますぜ、また第一に腰掛の下、うす間くつて身を忍ぶには最も妙、をり／＼ただ足の先で夢中に、ばた／＼とするのみですから、更に危険はなし、あの狭い身動きの出来ない幕を卸した寢臺と来ちやア、まるで人間を我々のため寄附してくれたかと思ふほどに吸へますよ、どうです諸君、わざ／＼賣道具の多い家の中で、危険を冒し働かずとも宜いちやアありませんか、僕は實驗の上にて、諸君へ旅行を進めますが、いか

がです」

「いかにも面白い説ですが、限りある汽車と旅客に對して、かぎりのない多數の我々ですから、さう悉く旅稼ぎも出来ません、お説に隨うて出るものは出ると任せよう、ところで此まゝ多數の我々は第一、どういふ人間に向つて、最も安全に最も美味を得られませうか」

「さア、そこですな、その日の働きに勞れきつて夜は蚊帳もない貧民窟の勞働者、前後も知らず高駟に寝てるところは、一番に無事で自由自在ですが、本人の食物が悪くつて皮膚が硬過ぎて、まづい事この上なし、大に美味の點が缺けて居ますよ、それかと言つて美食美酒の滋養分に富んだ奴は、どうせ境遇も満足だから我々を防ぐ設備も手落なく行届いてるし、老人に血の氣は少いし、幼児には親が附いてるし、安全と美味の一舉兩得

「は困りましたな」

「もし強ひて求むれば、やはり今日の青年男女でせうよ、彼等は境遇と身分の奈何に拘らず、父兄の手前、男女いづれも學生時代といふ外出には至極便利な一種の放免時期を持つてるのみならず、わけて冬と違ひ夏は夕方から散歩といふ單純な文字の裏面に、いろんな種々の祕密を包藏して居ますから、これに向つて大に發展すれば、意外の利益が多からうと思ひます」

「妙々、それに限る」

「實は癩にも觸る」

「いや、人間の勝手にするこつたから別段、我々の癩にも觸らないが、實際に於て比較的
安全と美味を容易に得られますよ、いろ／＼外にも好都合の場處はありますが、まづ日

比谷の公園として、あれなら池あり樹あり我々が棲むにも最も適當の地で、加之も今いふ青年男女の散歩隊は招かすして自然に集まるでせう、ぶら／＼たゞ一人で歩いてる奴も、男は女に氣を取られ女は男に氣を取られて、手や足を齧されるぐらゐ何とも感じませんね、まして兩々相約したものとすれば、どうせ手を引き合つたり握つたり掴んだりするんですから、いくら暑くつても風が通さなくつても、なるべく茂つた薄闇い日の早く暮れる葉蔭を選んで、雙方お互に夢我夢中ですもの、顔の中央を齧さうが何處を齧さうが、それこそ此方のもんだ、さんざ吸つて、飛べなくなつても、わざ／＼白いものを見付けたり床の間の掛物へ苦しい思ひをして這ひ上る世話はなしさ、おまけに味は人間發育の眞ツ最中、前後無差別の戀に總身の血が湧いて、猶更ら堪りますまいよ」

かゝると總て一切、他の感覺を失つて仕舞つて村木も同然だから、こりやア戀を硯ふに限る」

「それも實は、あまり硯ひ過ぎて深入すると、いけない、あら貴君、蚊が止つて居ますよ憎い事、人もあらうに貴君の血を吸つてさ、かういふ調子で、我々を寧ろ戀の媒介に、びしやりと遣りかねないから、そこは臨機應變でね」

「なアに構はない、少々の犠牲を拂つても、戀の方を攻めかけるさ」

「もし戀の外とすれば、淺草のやうな繁華雑踏の地ですな、第一あの活動寫眞、あれが我々のため最も面白い稼ぎ場處で、ぎつしりと詰つた奴を片ツ端から遠慮會釋なく、マンペンに吸つて廻るさ、これも寫眞に氣を取られて一所懸命だから、茫然と用がなくつて家に居る奴よりは、よほど仕事が樂だ、やはり中には例の手と手を握り合の薄馬鹿が居

るから、そんな奴は寄つて集つて體量の減るほど吸つてやるべしだ、いやに乙ウ饒舌つてる活辯の鼻の頭を、ちよいと遣るも滑稽だ」

「愉快愉快、さアかうなると、寢さうの悪い下女の蚊帳から食み出した隻足なンか、びくびくして吸ふには及ばない、すぐ今夜から日比谷と淺草の方面へ出稼ぎと極めよう」

「出稼ぎも宜いが、途中に氣を付けないと、堀返りの小鳥だの蜻蛉だの、樹の枝に蜘蛛の巢なンか、いやなもんが澤山あるから、なるべく人間の身體を離れないやう、くつついて行くが安全だ」

「しかし途中で人間に掛つちやア無効だぜ、向へ行かない先に遣られるやうぢやア何にもならない、腹が減つても堪忍して先を樂しみにするんだ、途中だけ人間と思つちやアいけない、我々を運ぶ馬か車と思やア宜い、實際、また馬や車より劣つた人足が多いんだ

よ

淺草の觀世音

川の底より金色の光輝を放ちて出現ましませしといふ傳説以來、内陣深く一寸八分の御像を以て、十八間四面の大堂に安置し、丈餘の仁王尊を不斷の門番として日夜幾萬の人間に隨喜渴仰せられ給ふ淺草の觀世音菩薩、

「これは何物だ、はゝア、けしからん女が來たわい、かういふ女が居るから、佛の住むところに鬼が棲むとか、赤い御堂の背面に白首が居るとか、いろ／＼世間で宜しくない噂を立てる、實際また清淨の靈場たるべき我境内を穢すのは、これだ、何とかして救うてやりたいが、もはや本來の性根を失うて自墮落の底に沈み果てた女、逆も度し難い、女

一代に男一人と定めた出雲の方でも、呆れて帳消になつた筈の女が乃公の方へ何を願ひに來た、おや、みつ豆も買はずに奮發して白銅を二個も抛げたな、いくら賽錢を出しても乃公が取るんでない、何、身體を達者にして金のあるお客を付けてくれ、や、ますます圖に乗つて我身しらすの事をいふわい、いかに觀自在でも近來は手が廻り兼ねて、正直に働くものゝ病氣さへ悉く助けきれない世の中で、其方達の身體を達者に仕て遣れるかい、第一もう毒は満體中に満ちてるぞ、まだ人間には知れまいが、乃公には臭くて堪らん、今に皮一重を吹き出して熱柿の腐れ落ちるが如く、折角この世へ満足に生れて來た五體を、めちやく／＼にするんだ、しかし金のある客は見付け次第に附けてやらう、凡そ男女の數は大定、過不足のないやう都合よく一對づゝに極めてある筈だが、わざと無理に隠れて、其方のやうな穢らはしいものを天女の如く心得、家業も勵まずに迷うて來

る奴、どうせ金を持たして置いても、ろくな事は仕ない、これも無効だ、同じ無効なら早く無効の終りを見せて、もし後悔すれば深入のない間に何とか仕て遣はさう、よしよし客だけは請合うたぞ、長居しては外の参詣人が迷惑する、その方が其處に居ると淺ましい人間の凡情、また妙な氣になつて、ふら／＼とする奴ないにも限らない、早く歸れ歸れ」

「はてね、今度、來たのは何であらう、むゝ待合の女將なるものか、今の白首と五十歩百歩の代物だ、いはずと知れた家内安全延命息災商賣繁昌を頼みに來たんだらうが、どツこい、さうは巧く行かないよ、考へて見ろ、どれほど其方達に腕があるか知らないが年中、すきな美味を食つて、すきな衣類を着て、演劇は御坐れ花見は御坐れ、贅澤のあらんかぎり出来るだけの好きな眞似をして、その間に隠れ遊びの情夫は拵へるし催促の

ない義理は遠慮なく缺くし、朝寝はする、晝寝はする、客を咬して夏は海濱へ出かける冬は温泉へ出かける、加之も資本金は舌一枚の世辭愛嬌で、眼前に御前扱ひしながら影へ廻つて舌を出すといふ不埒千萬な家業が、外にあると思つてゐるか、それで家内安全延命息災商賣繁昌は、あまり世間を馬鹿にし過ぎた無理な願ひで、第一この乃公に對して、よくまア、そんな太い事を頼みに來たよ、ちよいと目下のところ心配もなくて家業の全盛に見えるのは、いかなる悪木も一度は春に花の咲くと同じ理で、秋をも待たぬ身の末は分つてるぞ、何、是非とも御願ひ申しますウ、まだ此奴、づう／＼しい事を吐す山師に擔がれて正體の怪しい狐や狸を祭つた祠なら多少、鳥居や供物の手前で承知するかも知れないが、日本隨一の東京で東京隨一の歸依渴仰を集めた乃公なにかア、いやしい其方達のため流行らさうといふ考へは微塵もない、歸途に鳩へ豆を蒔いたぐらゐぢや

ア無効だぞ」

「やア今のと違つて、これは案外また殊勝な連中が遣つて来たわい、善哉善哉、わざ／＼遠國から東京見物の第一に何は借置き、宮城を拜した後まづ乃公のところへ参詣に来たと見える、いづれも若い時から脇目も振らず田や畑で、生々しい理窟もいはず一所懸命に働いた律義な片田舎の爺と婆ばかり、ほ／＼ウ十八人も居るわい、互に見失はないやう胸に旅館の徽章を附け手と手を繋げばかり一團になつて動く工合、いかにも質朴ぢや親子兄弟知己朋友の間も油断なく警戒して用心せねばならない都會の人間は、何たる哀れなもんであらう、いち／＼小さな風呂敷包みを背負つたり腰へ巻いたりした工合、鰐革の手靴を提げたよりも實に尊いところがある、この繁華な東京に生れて自己一人を食ひ兼ねる怠惰者の多いに引き替へ、百里も二百里も隔つた山と谷との間から生涯一度の

都見物は天晴れの手柄ぢや、大變な働き者ぢや、加之も生れて以來まだ夢にも見ない此大都會を始めて見るのは、つまり眼前の極樂へ来たと同じ事ぢや、しかし馬車や自動車の立派に驚いて、もし羨む心でも起してはいけないぞ、あれは、濁世煩惱の地獄を馳せ行く火の車ぢや、は／＼ア一列に頭を揃へて何を頼む、何、一村に事なく豊年の續きますやう、また勝手ながら子どもや孫の煩ひませぬやう、いや心得た、政權を争うて天下の宰相たる總理大臣よりも、サツと公明正大に誠實の信念が籠つて居る、あゝこれ／＼、さう遠慮するに及ばない、その前を威張つて通る奴は女の浪花節か活動寫眞へでも飛び込む序に來た奴で、お前達に較べて見れば蟲虻も同然ぢや、おゝ歸るか、よく來た、善哉善哉、安心して行け、菩薩界の自在力を以て守るぞ」

「これは何だ、は／＼ア、懐手をして世を渡りたいといふ慾の深い智慧の浅い押の強い奴だ

な、どうも近來は不景氣で困ります何か一番、寝て居て生涯を食へるほどの、でツかい金儲けを授けて下さい、その代り出来ました以上、雨が降っても槍が降っても御恩を忘れずに必ず日参いたしますとは言語道斷な奴ぢや、不景氣で困るなら何故その不景氣で困らないやうに働かない、世間の景氣と不景氣とは其方の都合を考へて居らんど、第一また寝て居て食ひたいとは、殺されない豚のやうな願望をする奴だ、もし出来ました以上といふ奴に限って、もし出来た後に約束を守つた凡例なし、加之も雨風の日参が其方この乃公に對して、どれほどの恩返しと心得てる、わざ／＼暇を潰して今日で三度も参つたのに、まだ效驗がないと神佛を相手に不足を持ち出すのは、かういふ奴ぢやな、定めし友達を欺したり親類へ喧嘩腰に無心を吹ツかけたりするぐらゐの事は、人間の當然で仕ないだけ損だと思つてる奴だらう、こんな奴が女にかゝると無理心中するに極つて

る、苦しくなれば盜賊もするに違ひない、こりやア乃公の方より此まま人間界の警察か監獄へ廻るべき奴だ」

「さて今度は勇み肌な奴が来たぞ、や、印半纏に腹がけ股引、向う見ずに氣は荒いが欲得なしの其場かぎりで、いかにも罪のない奴だ、願ひは何だ、何、よろしく頼みまする、は、無茶な事をいふわい、しかし愛すべき點がある、おや、もう引ツ返して、さつさと出て行く、あゝいふ氣風に學問と智慧と身分とを與へてやれば、利慾に傾かず權勢に屈せず時流に媚びず、恬淡快活、面白い人間が出来るに」

「はてね、今度は妙な奴が来たぞ、舊俳優の下廻りでもあるまいが、色の生白い年の生若い瘦形で、びかく著物を嫌に光らして香水の匂ひ、ぶん／＼するところは、まだ世間に苦勞の足りない青二歳で、親の脛を噛る齒を磨くのに一時間ぐらゐづゝは儘に掛る奴

だな、こいつ何を願ひに來た、何、實は或藝妓と或娼妓に深くなりまして、今更ら退くに退かれず兩方に義理が立ちかねます、それも最初は私の方から惚れたのでは御坐いません二人とも先方から熱くなつて來て、おまけに今日では雙方とも互に掛づいて居りますから、ます／＼意地と意地との張合で、もし中間に立つた私が無理に遁げました曉はかはいさうに二人とも生きては居るまいかと心得ます、南無觀世音大菩薩、お慈悲を以て何卒あの二人も殺さず捨てず阿父も怒らず私の身も無事に相立ちまするやうとは、此奴め何を吐す、その方が目下の人間に向うてさへ、ものを頼むに自惚まじりに頼む奴があるかい、第一また人情の影も形もなくなつた今日の世の中で、そも／＼藝妓や娼妓に立てる義理といふもの、どこの隅に残つてのを探し出して來た、先方から熱くなつて來るのは、向側の火事だぞ、もし其方が遁げて二人とも生きて居らないといへば、ちよ

いと試みに遁げる眞似をして見ろ、二人とも死ぬ眞似は借置いて、背後から箒で叩く眞似ぐらゐするだらう、また實際その箒で、ぶつても叩いても差支ない、昔より傾城の舌だけは閻魔の方でも抜かない事になつてゐるんだ、藝妓にしる娼妓にしる、嘘を申しますといふ看板をかけて賣つてゐる品物に、嘘をいふなど無理な注文する白癡があるもンか、たまたま百人に一人や二人の眞實があつても、そりやア横町で金を拾つたやうなものだ互に喧嘩しながら生涯夫婦の友白髪はあるが、すいて好かれて惚れ合つた交情は五年と續かないのが當然だ、まして其方のやうな乳臭い馳け出しの青藏に、雨後の青蛙は飛び付くとも、人を手鞠にする家業の女で飛び付く筈がない、もし萬々一、それとも飛び付くやうな事があれば其方の家庫へ飛び付くんだぞ、随分こゝへは種類の白癡が身のほど知らぬ馬鹿な願望を持つて來るが、あまり圖外れに馬鹿の念が入り過ぎて、罰を當てる

ほどの價值もない、幸ひ家庫が満足に残つても、どうせ親父の後を其まゝ無事に嗣げる奴でないから、昔でいふ紙衣の末、イツそ早く世にも人にも見棄てられて眼の覺めた頃食ふや食はずの檻褌を身に纏つて來い、馬鹿は馬鹿ながら人間の悪い奴でなし、落ちるだけ一旦、落魄れた上で、また其時は屑屋にでも仕て遣はさう」

「や、今度は髻を生した五十前後の洋服だな、風采から見ても年輩から見ても、まさか白癡た馬鹿な願望は出來まい、何、いよく明日が市會議員の選舉當日で御坐いますから何卒、首尾よく最高點を以て當選いたしますやう、實は昨年以來、それ／＼油断なく運動は致して居りますが、近來の選舉人、なかなか的にならず、動もすれば御馳走の食ひ遣げをするものが多くツて困ります、おまけに家内のいふ事も聞かず親類縁者の意見も用ゐずして、無理に打ツて出ました意地も御坐いますし、第一は内々で案外の運動費も

使ツて居りますし、わけて養子の身分で、今度もし落選いたしました曉は、この五十面いよく立ち兼ねます、うまれば田舎で御坐いますが、幼少より御膝下の區内に育ちまして、随分これまで御境内の御普請なにかには人に劣らず寄附金も致しましたもの、かうなれば外に御継り申し上げる神様も佛様も御坐いません、明日のところ何卒、大悲大慈の御力を以て、出してほしいといふ願望だな、いや願望の主意は分つた、吾輩が偕大慈大悲の靈驗は龍華の曉に示すべき乃公の大切な力で、いはゞ取ツて置ききの藝當で、氣の毒ながら馳こつこを仕てるやうな今日の市會議員なにかには、おいそれと、さう容易くは出せないよ、決して出し惜しむ理由ではないが、諦めのため言ひ聞かして遣はさう、そも／＼人皇三十四代推古天皇の御宇、土師の臣中知の漁網にかゝつて宮戸川の底より出現せし以來、舒明孝徳、二帝の堂宇御造營に預り、また武家では當國武藏の太守

たりし平の公雅が田園三百町の寄進を始めとして、最も力を盡してくれたは承德年間の藤原成實、また幾度の堂塔回縁に再建の公卿武家も尠からざりしが、以上いづれも一身の榮華を念じ名聞を求められたのは一人もない、それに其方は今日、乃公は知ツて居るぞ、たツた十五圓の寄附金した事を手柄顔に大慈大悲を一人占に欲しいとは、とんでもない願望ぢや、加之も其方あの十五圓を出した時、寄附連名の建札に十圓と同一の字では嫌だ、も少し眼立つやう太い字で名を書いてくれというたは全體、どういふ料簡だ、第一また今日の市會議員が何だ、さらに一例を言ツて聞かせる、源平が互に權勢を争うた時左馬頭義朝、わざ／＼乃公のところへ參詣に来て武運長久を祈り、鎌田兵衛政清を奉行として堂塔の修營いたした事がある、その義朝さへ戦ひの名が正しからざるため、この乃公は助けなかつたくらゐだ、しかし子息の頼朝を世に出してヤツた、以來、新田足利

の諸將、わけて小田原北條一門の歸依渴仰を受け美田を寄附せられた事は、その五圓の十五圓どころぢやアないぞ、また其方が僅一時の十五圓を手柄顔にすれば、この乃公が居るため昔より今に至るまで淺草一體の繁昌、現に三四代つゞいた其方の商賣なんか皆これ乃公の庇護といふ事に氣が付かないか、白癡め、また市會議員になツて其方は全體、どれほどの働きの出来る人間ぢや、内々で案外の運動費も使ツて居りますといふ以上、乃公の方へ頼まずと運動費を出した方へ頼むが宜い、市民のためでなく運動のために出ようとするれば、運動費の多い奴が出て少い奴が負けるに極ツてる、もし幸ひに當選すれば他のものより運動費の多かつた證據で、もし落選したら尠かつた證據で、これほど明かに分ツた今日の競争沙汰を、乃公の方へ持つて来るやうでは其方、よほど狼狽へてるな、よほど血迷ツてるな、うか／＼すると明日は危いぞ、どうやら覺束ないぞ、たとひ

最少數でも當選しさうでないぜ、まして、首尾よく最高點は迎も無効だ、もし落選した
曉は、養子の身分で家内に對し親類縁者の手前この五十面さげて大變な事になりますと
いふが、それは最初から承知の上だらう、順々に年を取つて來た五十面は今更ら仕方が
ないぢやアないか、萬一また市會議員の競争ぐらゐに狼狽へたり血迷つたりするやうな
奴が市會議員になれば、ますく逆上せあがつて何をするか知れない、吝な賄賂でも取
つて、ふん縛られるより今のうち落選して仕舞つた方が僥倖だ、當飼ひ扶持の隠居でも
させられた方が無事だぞ」

「は、ア今度は十五六の小娘、まだ肩揚の深い、あどけない可愛らしいもんだ、あまり貧
家の生育でもないらしい、さりとて令嬢といふでもなし、すきな著物でも澤山に欲しい
といふのかな、はて何を願ひに來たかな、何、何だ、どうか後生ですから觀音様あの方

と添はして下さい、や、此女め、此女め、一ぱい食はせをツたぞ、近來の女は顔と年頃
だけでは、さつぱり分らない、子供かと思へば、なかく大膽に油斷も隙もならない事
を吐すわい、あの方も、この方もあるもんか、もし親でも煩へば、どツちへ向いて奉公
いたしませうと願ひに來る分際で、もう男の選り好みを仕くさる、それも人しれぬ心の
底に取り止めもない淡雪のやうな初戀の兆ならば格別、後生ですから觀音様あの方に添
はしてくれとは怖ろしい女ぢや、行末が思ひやられる、かういふなのが、とんでもない
奴の手にかゝつて、竟には身の破滅を來すのだらう、や、乃公を拜むだけで承知せず、
御圖を取つてる工合、ますく凄いで、この様子ぢやア、とんでもない奴にかゝるより
も反對に、とんでもない奴をかけるかも知れない、かういふ小娘が來るやうぢやア、ろ
くなものは來まいから、これで今日は寶帳を閉ぢて仕舞はう、まづ今日中の第一等は田

舎の爺と婆であつたわい」

目黒の不動尊

天臺の慈覺その開山となり、慈海その中興となりて、泰叡山瀧泉寺、こゝに金剛盤石を据ゑ給ふ威徳明王、世間一般に友達の如く目黒の不動さんといふ、脇士に八大童子あり、夜深く風死し人定まりて後、森々たる境内の寂寞を破りて、細けれど垢難場に落つる俱梨迦維の瀧音、いよいよ物凄し、

聞たる四方まツ黒にして、人間は鼻を掴まれても知れねほどの闇なれど、炎々たる迦樓羅の焰に電燈の光りも入らず、明王ますく青黒憤怒の形相を現はして、傍に侍立せる八大童子に語りぬ、

「童子ども、いかに澆季末世とはいひながら、近來の人間め、けしからん奴が多いぢやないか、春先の陽氣に連れて、ぶら／＼遊び半分に来るか、乃至また箱飯でも出る頃にならないと、この目黒へは参詣に来をらん、そのくせ市内の深川や薬研堀には、びい／＼北風の吹く時でも、毎月二十八日の縁日を持ち兼ねて、ぞろ／＼と出かける、もし足場が悪くて遠出が嫌ならば、わざ／＼下總の成田くんだりまで何のためぢや、虚空大地いづれにあるも一體分身、他の繁昌を羨むではないが、さりとは浅ましい、人間どもぢや」

「明王の仰せられます通り、段々と近來の奴ども、怠惰者が多くて萬事に無精な上、づら／＼しく横著になりまして、恐ろしいといふ事を知りません、栗飯と箱飯の出る時分でも、こゝへは参詣いたさず、権八と小紫の墓へ線香を立てる奴の方が寧ろ多いやうで

御坐います、たま〜参るものがあれば、勿體なくも御像に對して、昔から不動さんの劍に鞘がないとか、まッ黒な顔に眼を刺き牙を刺いて何を怒ツてるとか、さま〜な屁理窟ばかり申します」

「や、さういふ奴等が多からう、衆生濟度のため殊更ら圓滿柔和の菩薩界を離れて、青黒の面に憤怒の相を現はせど、頭に八葉の蓮華を頂く恩威並行の主意を知らない、一眼は天に朝し一眼は地に俯し一の牙は上に生じ一の牙は下に生じ右を掻きあげ左に辨髪を垂るゝ慈嚴兩用の理由も知らない、まして金翅鳥が諸の毒鳥を食むべき形狀を以て燃え立つ迦樓羅焰の有難味も辨へず、右の手に今日の法律を示すが如く惡魔降伏の大利劍を持し、左の手に三昧の羂索を携へて深甚の道德を示し、この衆生一切を救ひやらんとする大定智大教化の威徳も解せずして、いたづらに目黒を栗飯と筍飯の名所に心得、我に養

莫三曼多縛日羅の祈願を籠めず、市井の癡話に狂ひ死した權八と小紫を弔ふとは何事ぢや、あれは辻斬の盜賊と血迷うた女郎の墓でないか」

「さア、そこで御坐います、近來の人間ども、自己が煩惱を救はるべき具足大定の有難い示現よりは、やはり眼前に狼狽へて情死でもするやうな男女の間に眞理があるものと思ツて居ります」

「思ツて居らしては、いかにぞ、夢にも思はないやう、何とか警めてやらねばならん」

「しかし明王、我々も不肖ながら御脇士を勤めて、また及ばずながら如是功德の能誘衆生のため、随分これまで深甚無量の骨を折ツてやりましたが、もはや今日のところ、いくら警めてやツても眼が覺めません、夢にもと仰せられますが、男は女を女は男を絶えず夢にばかり見て居る奴等で御坐います」

「はゝア、さうなツてるかな」

「さうなツてるどころでは御坐いません、實は過日も成田まで御使者に参りました節、矜羯羅と制叱迦の二童が申しますには、近來の人間なか／＼大膽になツて來た、呆れるぢやアないか、火生三昧の大護摩を上げてる前で、口に聖無動尊大威怒明王と唱へながら男と女が互に膝を抓ツたり懷中へ手を入れ合ツて乳くツてる奴がある、つまり清淨梵行の壇場を穢すのみでなく、第一は明王の威徳を馬鹿にした奴等で、あゝいふ奴を今後あのまゝに仕て置いては、惡魔降伏の大利劍も何の功德はないと、殆ど鐵杖を抛ち蓮華を棄てンばかりに歎息して居りました」

「もはや教へても警めても無効かな」

「無効で御坐います、いかに明王が金剛不壞の大盤石に坐して、人間の意志を動かさざる

こと斯くの如くせよと示されても、今日の人間は浮草の水に漂ふ如く大風に灰を撒いた如く、逆も不動不屈の信念力が御坐いません、また明王、いかに青黒憤怒の相を現はされても、いかに惡魔降伏の劍を持せられても、自己の心に疚しき事を怖れて罪を謝し行ひを改めざるのみか、今いふ如く現在その前で乳くり合ツて嬉しがるほどの奴等で御坐います、また明王いかに大智慧を以て迦樓羅の大火焰を生じ給ふとも、これがため貪瞋癡の妄念を焼き棄つべき思慮さらになく、いかに三昧索を以て無相法身の所求圓滿を教へ給ふとも、馬耳東風の奴輩、これを信受し奉行し得るものは一人も御坐いません、惑現慈體、惑現憤怒、いづれの方面より教化されても、法樂法雨を蛙の面に水と心得たる凡下凡俗、もはや令得安穩の時代は過ぎ去ツたかのやうに心得ます」

「既に令得安穩の時代が過ぎ去ツたとすれば、形像を以て普く示すだけでは今日の奴等、

機根薄弱にして迎も會得し成就し難い、いよく摧破魔軍の大法力を衆生心想の中に移し植ゑねばならん、しかし童子どもよ、過日外國から新たに歸つて來た或學者が我前に禮拜して、大に驚いて居たぞ、希臘羅馬その他の古代に於ける理想的の偶像中、世界いづれの各國も未だ曾て我ほどの慈愛と權威の具備せるものなく、また我ほどの法律と道徳の兩面を遺憾なく現はして居るものはないのみならず、現に或大學の最も完全なりと誇れる徽章には、劍と秤を交叉してあるさうだぞ、然るに日本の馬鹿者ども、眞言天臺の兩部を介して古來この我像を眼前に示されながら、栗飯と筍飯より粗末に扱ひ、盜賊と女郎の情死した墓より輕んずるに至つては、沙汰の限りだ、また歴史の一説によれば、日本或尊、東夷征伐に兇徒その四方を圍みて放火せし時、携へ給へる狩犬の綱を切つて敵に放ち、佩び給へる叢雲の劍を抜いて燃え來る草を薙ぎ、炎々たる猛火中に立

ち給ひし憤怒の形相、宛ら我に似たりとて、この目黒に尊の靈を齎し故事あり、他之地と違ひ當山に限りて樓門左右の金剛密迹仁王の傍に使者犬の像を安置せるは、これがため、外にあるまい、して見れば今日人間ども、國家に對する觀念と自個に對する理想と、公私兩面の上より猶更ら以て大切な道場とも靈場ともすべき筈を、ぶら／＼歩きの遊び場處にするとは、いよいよけしからん奴どもぢや

「いかゞ致して懲しめませう」

「まづ慧光童子は、おのれ一身の利欲に迷ふ奴を引つ捉へて、その利欲のため自業自得の大間違ひを起させ、監獄へでも叩き込む役目になるが宜からう、つづいて慧喜童子は、半獸的の劣情より戀だの愛だのと騒ぎ廻る奴を引つ捉へて、その獸欲のため自縛自縛の煩悶を起させ、生きてるか死んでるか本人も分らないやうな憂目を見せてやるが宜から

う、また阿耨達多童子は、いたるところ嘘八百を列べて世の中を誤魔化さんとする奴を引ッ捉へ、おのれの吐き歩いた嘘の柵に身動きのならないやう縛り付けて仕舞へ、指徳童子は、慈善とか博愛とか天下あらゆる名聞の下に巢を作ッて自己の醜惡を祕さんとする今日の太い野郎どもを掴みあげて、二度と再び世間へ面の出せぬやう、いち／＼その化の皮を引ンめくツてやるが宜からう、また烏俱婆誑童子は、身分不相應の他位に這ひ上ッて自己の不徳も顧みず淺劣にも恥ぢず、みだりに虚威を張り虚勢を張る當今の大面どもを遠慮なく片ツ端から引き摺り下して、もしまた壽命があればワザと殺さず生涯不治の難病に苦しめてやるが宜からう、また清淨童子は、口に公明正大を叫び清廉潔白を誇りながら常に絶えず社會の闇黒面へ出入するが如き、むさい奴どもを一掃除するが宜からう、矜羯羅と制叱迦は遊軍となッて以上の六童子に力を添へ、もし萬々一その手よ

り漏れ来る奴あらば、首筋を捻ぢ胸骨を挫ぎ、脛も腰も叩き折ッて、炎々たる我この迦樓羅焰に焼き盡して仕舞へ、しかし焼き直してやるんではないぞ、もはや度すべからざる人界の害毒物、灰も残さない決心ぢや、心得たか」

「心得ました、實は明王の仰せなくとも、此まゝに捨て置けば、どこまで附け上るか知れぬ奴等、何とか致さうと思ッて居た折柄で御坐ります」

「汝等、もし八人で手が廻らねば、さらに三十六童子を呼んで加勢に遣はずぞ」

「いや、それには及びません、人間同士の間でこそ多少の悪運に強い奴も居りますが、お蔭を以て法身體廣の給仕行人を得ました我々より見れば、腐れに湧いた蛆蟲ども、一擺みに數萬疋は何でも御坐いません」

「さうなうては叶はん、當遠離是修行者所住處之處一百由旬内無有魔事及鬼神等」

浮世

これを社會といへば、事々物々に面倒なるのみならず、さも學者らしく博識貌に説明せざるべからず、これを人生といへば、言々句々に難解の文字を用ひて、さも高尚らしく或は宗教的に説明せざるべからず、只これを單に浮世といへば、通俗的自由自在にして、加之も面白く手痛く人間の急所に當ること多く、その裏面を穿つことも多し、されど浮世を説くも亦、いたづらに無用の手数を要するに及ばず、幸ひ昔の川柳にして猶いまだ生命を奪はれざるもの、寧ろ今日の世態人情に適中せるものを選び、これを讀書時間なき諸君の前に呈すべし、

俗に雅を含み眞面目に滑稽を帯び、洒落にして深遠の意味を寓せるのみか、單刀直入、いはゆる寸鐵の人を殺すが如きは、却つて過去の産物たる川柳の句に多し、今日の文章家、否、文章屋先生また以て如何とす、

○その後は穢味噲和尚ばかり出来

澤庵和尚の死後、どれも皆これ鼻持のならぬ穢味噲和尚のみなりとは、今日の宗教家にも頂門の一針なり、

○五百から一體ぬけて人に摺れ

賓頭盧尊者、いたづらに高く止まりし五百羅漢より脱け出で、眼も鼻もなくなるほど下

界の人間に接觸し給ひ、寧ろ俗に入りて直接の教化を行ひ利益を興ふ、今日の救世軍よりは一步お先へ氣が付かれて、手を下されたり、

○小判は口の蓋する形なり

今日の紙幣またベツたりと口に張り付けて物をいはせぬ力あり、されど口塞ぎは只これ時の賄賂のみ、もし露現すれば忽ち一身の破滅を來し國家の大事にも及ぶ、

○通りぬけ無用で通りぬけが知れ

人生これに類すること最も多し、また世間の悪辣なる奴、常に六法全書を携へて、公表の建札を承知しながら、寧ろ其裏道を通りぬけむとする事に汲々たり、

○傘を傘で返す律義もの

この雨に先方も入用だらうと傘の垂れる間に早速返しに行くやうな正直もの少く、助も

すれば丁寧に乾して疊んで其まゝ自己の所有にする奴多し、

○約束の首とりに行く大晦日

年末の苦しませに、もし間違へば首でも遣るといひながら、その日になりて遁げ出すはまだ昔の優しい部なり、今日は常に絶えず嘘八百を列べて首を賭けながら、無論いざとなつて渡す筈なく、わざわざまた取りに行く者もなし、つまり嘘が殆ど一般の通例となれるためにして、もし大晦日なれば、餅は搗く是から嘘を吐くばかり、かういふ横著な奴のみ増加せり、

○なつかしくゆかしくそして金と書き

古今ともに花柳の巷より来る白粉臭い女の戀文は十中の八九、いづれも皆これなり、その最も露骨なるものは、身代はなくしまわらせ候かしく、御用心、御用心、されど多く

は名文名筆のないものなり、馬鹿を釣る餌に蚯蚓をのたくらせ、

○獨身もの隣の娘うなされる

その獨身ものは二階借の猛烈なる自然主義者にして、人生は只これ戀愛の實行にありといふ色魔先生なるやも知るべからず、毎晩、おとなしい娘の魔さるゝ筈なり、

○國の母生れた文を抱き歩き

故郷の母が遠く離れし娘の安産といふ報知を得て、かはいゝ孫のやうに其手紙を近處へ抱き歩くとは、いかにも親の心を穿てり、今日ならば電報を抱き歩くべし、

○あツてさへ況や無きに於てをや

罵り得て妙なれど、今日の未亡人に、うか／＼この論鋒を以て迫れば、とんでもない逆捻を食ふべし、但しあツてさへの一句だけは斷じて許すべからず、入らぬこと在于すが如

く作り立て、これも今日は刃りに未亡人の攻撃材料とすべからず、良人に對する妻なるものは良人の死後その石牌の番人たるべき義務がありますかと仰せられるほどの今日、吐られた事も戀しき魂祭り、この句は猶更ら不用となれり、

○ほれた奴みぐるしいほど使はれる

世間の義理人情を缺いて約束に背くとも、いち／＼女のいふ事だけは有難く心得、女のためには傍で見居れぬほどにコキ使はれる奴、頗る多し、女には儲たのもしい男なり、この句と同じ意味にして、かういふ奴は必ず男の方に對して甚だ頼母しからざるものを知るべし、

○諫めると穴だと始皇おどすなり

穴の中いはゆる是が秦の間、前後この二句は憂國の志士と新聞記者などに最も苦き經驗

あるべく、言論の自由も出版の自由も、をりく當にならぬ世の中なり、

○泣きながら眼ま配る形見わけ

人情の恐ろしさ、うツかり涙を信用すべからず、ほろりと落されて、ころりと欺される事あり、

○人に物たゞ遣るにさへ下手があり

人の物を取るには智慧も工夫も必要なれど、たゞ物を遣るに上手と下手のある筈なしとはお坊ツちやんの考へにして、たゞ遣るほど難しき事なく、實際は寧ろ人に物を與へて恨まれたり怒られたり不足をいはるゝもの多し、

○みな色と金だと閻魔帳をくり

今日の裁判所また刑事問題の原因は、やはり皆これ多くは色と金なり、

○寝る家を娘ころんで引き起し

この引き起しやう、善いか悪いか俄に判断すべからざるも、この實例は頗る世間に多し、さらに一句、借金しやくきんの穴へ娘むすめを埋めるなり、

○持参金ならば手柄てがらに去ツて見よ

持参金ちさんきん嫁よめなけなしの鼻はなにかけ、いづれも妻つまじき細君さいくんの權幕けんまくかな、これが旦那殿だんなどのたるもの曰く、どう致いたしまして、去るどころでは御坐ごすわいません、今日こんにち、かうなりましたのも皆、貴女あなた様の御蔭ごかげと有難ありがたく心得こころえて居ります、

○豫讓野暮女郎買でも忠は出来

身に漆うるしして衣きを裂ききし豫讓よじやうよりも、遊女いうぢよに戯たはびて首尾しゆびよく敵てきの首くびを取りし我朝わがてうの大石良雄おほいしよをいふ、痛快つうくわいなれど聊いさか譽ほめやうの言葉ことばが卑近ひきんなり、大石おほいしの川柳せんりうこの他に種々しゆんぐあり、

石に精あつて固まる四十七、假名手本の字は京に詫住居、一家中手本の外は反古になり、ちりぬるを追ふな追ふなといの字下知、大石が重荷おろした泉岳寺、

○蚊は出たが帳はモシ旦那どうなさる

食ふ蚊より食はぬ蚊帳までぶち殺し、この句と同意味にして、喚アどのに一本まゐらるる御亭主、敢て貧民痛のみにあらざるべし、

○どの嘘がほんの夫婦になるだらう

嘘を商賣にする女、どの嘘が誰に中るだらうと嘘から出る實を覘へり、その嘘を實に引受けるもの、幸か不幸か、

○嫁はいぬ氣姑はさる氣いがみあひ

嫁と姑の間の犬猿管ならざるもの、さらに一句あり、嫁應學姑祖仙で家が採め、この類

は最も世間の實例に多し、新舊思想の衝突、猶更ら今日に珍らしからず、

○母親は息子の嘘を足してやり

子に甘き母親の常として、厳しき父の前に入らざる辨護するがため、往々かゝる家庭より不良少年を出すの恐れあり、

○あの女房すんでに己が持つところ

運よく持たいで僥倖、細君の選擇は及ぶかぎり力を盡して注意すべし、

○月と中よければ雨と不破の關

まゝならぬ人生、意の如くならざるもの哉、

○純友が来て誘ひ出す花の山

いかなる謀反を勧めに来るやら、なるべく友は選ばざるべからず、

○師直は見ても居られず墨を磨り

高師直が鹽谷高貞の妻に送りし艶書を、吉田兼好法師に書かせしといふ傳説あり、師直ほどの傲慢な奴も、内々そツと自己が勝手の頼みには傍で墨ぐらゐ磨らざるを得ざる人情の弱點、わけて今日いづれの方面にも此に類せるもの多し、ついでに兼好の一句あり、つれづれの外に々々も書き、

○奥方へ遺言はなし湊川

國家の大事を擔ふもの豈それ家を思はむや、武臣その身に錢を愛せず子孫のために美田を買はず、たゞ正行に遺志を嗣がせしのみ、

○家持をいへもちと讀む大家の子

百人一首の家持も利慾の眼よりはいへもちと讀まれて仕方なし、金錢以外に何等の趣味

も目的もなきもの、今日の社會、この大家の子に限るべからず、

○風鈴の中に一文世を遁れ

追窮迫害、あまり金錢金錢と騒いで追ひ廻るがため、うまく風鈴の中に遁げ込みし一文、竊に世間を離れて人間の俗惡を厭ふ、

○利を以て解くは質屋の繩目なり

満足に利を入れて質物の繩目も解き得ざるもの、理を以て天下の經濟を説くは矛盾の極といふべし、世間これに類する學者なきや、

○月の歌ばかり歸朝と奏聞し

阿部仲麿は異郷に死せしが、その名歌は長く我國に残れり、今日の洋行者中、もし海外の學窓に死して本邦に傳ふべき著書ありや否や、

○行々子は浪華も伊勢も同じ聲

浪華の葦、伊勢の濱荻、どちらでも同じ事、入らぬ無用の論に意地を張ツて時を費すに及ばず、その中で啼く行々子の聲は同一なり、徒らに名を争うて實を取り得ざるもの、滔々たる天下の議論家この行々子に恥ぢざるや、

○身上が傾くまでの月を見る

風流も程度を越えて財産の傾くまで月花に浮かれては困ツたものなり、されど風流は寧ろ財産の盡きるを以て本望とすれば致方なく、昔この句は遊里の月に用ゐたり、

○昔は何の某今は何もなし

名家の落魄、祖先を自慢するは祖先を辱しむる所以にして、また自己の馬鹿を告白するに止まれど、この馬鹿は最も世に多し、

○琴の爪袂にあつた流れ質

あはれに優しき女の不幸なる末路を盡し得たり、人生の波瀾、運命の翻弄、今日の小説家が千ページの悲哀小説よりも簡にして明なり、

○新世帯疊の上で味噌をすり

疊の上の味噌どころか、料理法の書物と寒暖計を手に放さずして煮物する新家庭の若き細君あり、

○箱を親に掘らせて食ひたがり

この不孝もの奴、

○暗い晩うぬが假聲通るなり

それでも本人は天晴れ名優の假聲を自慢の料簡なり、まだ暗い晩に通るだけの殊勝さよ、

青天白日の下、ぶろく／＼しく平氣に澄まし込んで他人の名論卓説を我物貌に饒舌りぬく奴あり、

○人の慾まなかへ乗る渡し舟

端でも中央でも沈む時は同じ一蓮託生なり、今日の電車にも老人子供を顧みずワザと脰を張り股を廣げて頑張る奴あり、停電も終點も同一なるべきに、

○うぬ見ろよ見ろよと股を潜るなり

うぬ今に見ろ、この侮辱を受けたまゝで終るものかと、時に屈せし韓信は果して大に伸びたり、男兒この氣慨なかるべからず、いはゆる臥薪嘗膽、これに類せる狂歌あり、人の股くゞりし人は戴きぬ金の冠玉の冠、さらに俗諺あり、韓信が股を潜るも時世と時節踏まれた草にも花が咲く、さらに和歌あり、行末は海となるべき谷水も暫し木の葉の

下くゞるらむ、川柳また一句、韓信に意地の悪い奴屁を嗅がし、

○あの男この男とて古くなり

あまり理想が大きく高すぎて、竟に行き場處を失ひし注文倒れの老嬢は今日の實際に動かからず、その多くは餘儀なき獨身生活に誇らざるを得ざるに至る、また哀れに御氣の毒の次第ならずや、

○ぬす人のたけ／＼しきは袴着る

袴垂に限らず、たけ／＼しき今日の盗人はシルクハットに燕尾服なり、加之も熊の皮を着て秋の野原に潜まず、馬車に乗り自働車を飛ばして都大路を縦横に馳驅せり、

○ぬかごから蒲焼までの憂苦勞

馬鹿馬鹿しき比譬なれど、ぬかごより山の芋となり山の芋より鰻に化けて出世し、また

蒲焼になつて世に賞美せらるゝまで、目的の成功、人間の生涯、なかく容易な業にあらず一足飛びに出世したいとは道行を知らぬ奴なり、

○雑煮も食はずに御用心御用心

門松は冥途の旅の一里塚といへど、世間の恒例に反いて正月元旦も祝はず悄氣返るはあまり一休の禪話に驚き過ぎたり、あはれや今日の青年これに類せる書を読んで、神經過敏の半死となれるもの頗る多し、

○妻を戀ふ馬と趙高詩に作り

鹿を指して馬と稱せし趙高、どこまでも瘦我慢を張りぬいて負惜しみ強し、驚を鴉と強情張る議論家また尠からず、

○のし餅もよくく見れば裏表

人情に裏表のある筈なり、

○たびく剥かれ厚くなる面の皮

千枚張ぐらゐの面の皮にあらず、もし砥石で擦れば砥石の方が減るべし、

○耳は馬面は蛙で親こまり

馬の耳に風、蛙の面に水、勘當は蛙に水のかげをさめ、この一句を最後に叩き出される奴今日なれば、廢嫡か禁治産の放蕩兒なり、

○溜めたがる費ひたがるで揉めかへり

十中の八九、父子の喧嘩これにして一家の揉め事これより生ず、いかに表面は立派なる意見の相違も主義の衝突も、その裏面に多少この内密を含まざるものなし、

○眼に立たぬ經藏大悟した僧の腹

七堂伽藍の雲に聳えたる名高き経藏よりも眞の大藏經は隠れたる大悟徹底の腹中にあり、和洋萬卷の書に埋もれて腹に一物なき學者先生また世間の白癡おどしのみ、

○業さらし死神にまで見放され

世に捨てられ人に捨てられて、生甲斐もなき一身の置處なく、さりとして死神にまで見放されて、死ぬにも死ぬぬといふ奴、つまり死損ひの五體満足に揃うた亡者どもは、今日の墮落せる人間に最も多し、

川柳の最も痛快に穿てる男女間の卑猥を避けて、なほ今日の世態人情に適用すべき以上の類のみを擧ぐるも、その多きは殆ど數へ盡すべからず、

こゝに平易簡單なる風流的の實際上より、人生處世の秘訣を含めるが如き一句を掲げて止むべし、

○行く水のなりには漕げぬ渡し守

渡し守は多年その川を漕ぐに馴れて、舟を行るに自由自在なるべき筈なれど、やはり流るゝ水に従ひ、瀬に伴はざれば、彼岸に達する能はず、人間いかに智力あるも手腕あるも經驗あるも、人道の大法に反き社會の大勢に逆うて身を處し世を渡るべからず

貧乏神

あまり人間の生活難を叫ぶ聲、あけても暮れても絶えず響き渡るがため、その悲鳴に猶更の勢ひを増し、今この時を得たりと遊團扇を叩いて四方より集りし數多の貧乏神、人間を咒ふ眼の光り物凄く、鬚髯は茫々と生えて血の氣のなき頬骨を失らし、頭上に薄き毛を振り亂し額に濃き青筋を現はし、五體は餓鬼の如く瘦せ細りて骨を露で、ぼろ／＼の

衣類を纏ひ繩帯を締め、首より胸に淺黄の色襦めたる頭阿袋を掛け、黒き足に尻切草履を穿ち素股を縮めて貧乏震ひしながら、一種異様の皺枯れたる聲を發して語り合ひぬ、

「まづ皆さん、お互に時を得ましたね」

「全く時節到来ですよ」

「かういふ時を外さず、これ幸ひ、この機に乗じて、うんと人間どもを窘めて置かうぢやありませんか」

「無論ですとも、かういふ時、びしく骨身に沁み込むほど窘めて置かないと、咽喉元を過ぎて熱さを忘れる人間ども、すぐまた調子づいて我々を馬鹿にしますからね、こゝは一番、うんとね」

「しかし皆さん、どうです、毎日毎晩あの喧しい生活難の聲は、實に小氣味よく愉快です

な」

「我々のためには、まるで天女の音楽を聴く心地さ、最初から我々の氏子になつてる奴ばかりでないから、一入また面白い音がするやうだ」

「さやうさ、これまでは我々を病ひ神と同じ扱ひで、生意氣に門口へも寄せ付けなかつた奴が、急に凹垂れて仕舞つたから、どこへでも大手を振つて自由に這入れますぜ」

「自由に大手を振つて這入れるのみでない、どツしりと尻を据ゑて床の間の前へ据り込んでも大丈夫、眞正面から鼻の頭を掴んでやつても追ひ退ける勇氣はなし、倉庫の中でも金庫の中でも、平氣で大の字に寝られますよ」

「昔は稼ぐに追ひ付く貧乏神なしと吐して、どうか斯うか其日を無事に稼ぐ奴は、いつも我々より一足先へ鼻唄まじりに歩いたもんだが、もう今日ぢやア、さうは、うまく行か

ない、世間普通の一人前に稼ぐ位の奴は、此方が鼻唄まじりの一足お先へ廻ッて、をりをり笑ひながら手招きをするから人間め、ますくあせり込んで、追ッて来る、いくら追ッて来ても此方は當分まア追ひ越される氣遣ひなしさ、へへへへ」

「一足お先へ廻ッたばかりでも興がない、たまには態と人間を一足先へ遣ッて置いて、その背後から唐突に濫團扇で追ひ廻してやると、いやはや驚いて狼狽へて、きりく舞ひながら、貧すりや鈍する工合、晝にも描けない、眼も當てられないとは、實際あれですよ」

「しかし中には、多年の貧乏どころか、先祖代々より貧乏馴れて、一子相傳の貧乏度胸を親譲りに引嗣いだ太い奴、いくら何でも此奴には困る、ちよいと手が出せない、うかうか手でも出すと、その手を引ッ張り込んで放さないといふ勢ひ、まるで我々を親類か友

達のやうに心易く思ッてる奴だから、かう我々の忙しくなッて来た今日、さういふ暢氣な奴には氣を付けて、なるべく此方で避ける工夫を仕なければなりませんぜ」

「いかにも、さういふ奴が随分ありますよ、世間普通の人情は我々に恐れて逃げる筈を、待ッて居ましたといはないばかりに武者振り付いて、やけに抱き占めるやうな亂暴な奴は此方で叶はない、わけて手の廻り兼ねる當節柄、とツ捉ッちやア大變だ」

「しかし自暴氣味で、武者振り付いたり抱き付いたりする奴は、また此方の考へ次第で面白く見える事もあるが、いくら濫團扇で煽ッても頭陀袋で叩いても一向無頓着、悠々寛寛として、さらに手應へのない奴がある、これが詩的だとか趣味があるとか、いや寧ろ風流だとか、つまり學問を仕損ッて妙に頭の捻くれた變な奴、かういふ連中も我々の忙しい此際はやはり一子相傳の口と同じく、うかくかまッては居れませんぜ、此奴は抱

き付かない代り我々の事を書いて筆の先で上げたり下したり、いろんな藝當をする奴だから猶更ら始末が悪い、只そつと其まゝ氏子の中へ入れて置くは宜いが、をかしく觸ると面倒だ」

「まづ此方で避ける方は、その邊として置いて、惰、さしづめ今日の場合、どういふところへ押掛けませうね」

「無論、人間の方でいふ中流社會が一番、這入り工合も樂で第一また愉快でせう」

「しかし當今の時勢ですから、いくら表面は立派に見える上流でも名門でも、ちよいちよい覗き込む必要はありません、もし今まで居つた福の神が急に居心地わるくなつたりまた逆も無効だといふ見切りを付けて、そろ／＼立ちかけないにも限らない、そんな時は早速入れ替つて、屋敷も別荘も一時に澁團扇で叩き立てるんですな、また中流よりは

潰し甲斐があつて、少々は骨の折れる代りに、面白味も一入でせう」

「だが、さういふところには、いろんな古い關係上、動もすると整理とか、いや捨てゝ置けないとか、外から不意に、我々の邪魔物が這入りやア仕ませんかね」

「なアに十中の一二、さういふ事もあるが、大廈の傾きは一木の支へ難き道理で、なかなかうまく救ひきれないのみならず、多くは整理殺しといふ結果で、却つて深切ごかしに倒れる手傳ひをするもンさ、よほどの任侠で清廉で加之も第一に整理の手腕がないと無効だ、自分が損を仕ない程度で智慧だけ貸さうの深切だけ運ばうのといふやうな人間ぢやア逆も救へませんよ、うか／＼すると、さういふ弱點を覗つて、どさくさ紛れに綺麗な面して汚穢い事を仕ようとする奴ばかり多くつてね、つまり内にも我々の味方がある理由で、前後の夾撃、内外一時の揉み潰しだから堪らない」

「なるほど、ぢやア上流の方面も、まんざら捨てたもンでない、おひく〜我々の繩張へ這入ッて来る順序だ、しかし手が著け易くツて、おまけに脆く落せるのは、やはり中流だな」

「どうしても中流は、底にも沈まず上にも浮ばず水の中央で、あツぶく〜苦しんでる境涯これを中流とは、いかにも能く言ツたものさ、もし水の縁を放して見れば、軒端の釣り燈籠で、ぶら〜途中に引ツか〜ツてる工合さね、ちよいと突けば、すぐに動く筈さ、もし釣り紐が切れりやア、ばツたり大地に落ちるんだ、は〜〜」

「考へて見りやア、あはれなもンさ、人間界で最も苦しい立場に居るんだからな」

「あはれは哀れでも、哀れがツて居ちやア我々の手腕が見えない、福の神だツて氣に入らなけりやア直に福を取り返すんだもの、どうせ最初から人間を呪ひに出た以上、黙くツ

て手剛い奴より、まづ數が多くツて落ち易いところへ押し掛けるのさ、中流を倒せば勢ひ上流にも波及する道理だ」

「のみならず中流の奴は、その組立の脆いくせに口も八丁、手も八丁で、絶えず常に我々を敵と見て、おとなしく我々の氏子たるに甘んじない、動もすれば退治たいとか、いや撲滅して仕舞ひたいとか、けしからん生意氣千萬な事ばかり吐して居る奴さ、吐すばかりでなく、をり〜不意に妙な工面をして我々の鼻毛を數へようとする工合、その他の萬事に就て甚だ許すべからざる點と憎むべき點が多い、どうしても此際、片ツ端から責め立て〜今後一切、ぐうの音も出ないやうに仕なければならぬ、蛇と同じく二度と再び生き返らないやう、彼奴等の頭を潰さないとな無効だ、割合に手足より頭の働くのが中流に多いから、猶更ら以て急所を遣ツつけるに限る」

「全く比較的に頭の働く奴等だ、あれで頭の通りに胴體と手足が働けば、ちよいと責め落すに面倒だが、ふしぎに幸ひ頭ばかりの人間で、やりくり上手とか世渡りの名人とか策士とか經濟家とかいふ奴は、猶更ら講釋澤山で手も足も實地の業に無精な奴だから、いふ事と、する事と、まるで反對だ、とンチンカンばかり仕てるところは我々のため實に面白い、あらゆる智慧を絞つた工夫工面で寸隙もない考へだらうが、我々より見れば這入る穴だらけだ、まだ穴のある奴は穴のないところを持つてるが、中には四方八方、さア何時でも入らツしやいと開けツ放しの不用心な奴が多い」

「おまけに中流の奴は、我々の這入り込む大穴を張らずに身分不相應の外観ばかり張つてるから呵しい」

「なアに本人は萬事、うまく浮世を張り終せる考へで、頻りに張つてるのさ」

「あゝいふ張りやうで實際、うまく張り通せる浮世なら、第一この我々の居所がなくなる道理だ、ところが近來のやうに大手を振つて、どこへでも自由自在に這入れる工合を見ると、ます／＼張りやうが間違つて來たらしい」

「間違つて居ればこそ、血の出るやうな苦しい工面の金で待合や料理屋を廻り歩いたり、眼球の飛び出るやうな高利の金で妻子を飾つて連れ歩いたり、それほどの馬鹿でないに似たところが五十歩百歩、たゞ一時の窮策と眼前の快樂を仕事にしてる人間さ、あれで我々を首尾よく遠ざけて防ぎ切らうとするんだから、いくら笑ふまいと思つても噴き出したくなるぢやアありませんか」

「また噴き出しても今日の彼奴等、我々が笑つたとは思はない、そこは自己の脚下に火が燃えて居ても熱くなるまで知らない人間だから、おや、これは有難い、どツか近くで禍

の神が笑ツたぞ、何か今に大變な儲ける事があるだらう、何は儲置き、まづ前祝ひに一盃といふくらゐの調子だ、背後から羽搔責にでも責め付けるか、眞正面から向脛でも蹴飛ばすか、それほど手荒い藝を仕掛けないと逆も氣の付く人間でない、少し性根のある奴でも、黙ツて這入り込めば、本人と差對ひに坐ツて居ても大丈夫、はつきり見える筈がない」

「しかし、さういふ人間ばかりもなからう、あまり見縊り過ぎて、折角、這入りながら、もし萬一、すぐに追ひ出されるやうな事があれば、我々の恥辱になりますぜ」

「なアに追ひ出されるやうな家は、そろ／＼福の神が近寄ツて来て、この門口を這入るか這入るまいかと思案最中だから、此方から見ても分る筈さ」

「なるほど、さういへば、さうだ、我々の這入り込んだ以上、追ひ出されるより叩き潰す

方が先だから、どうしても福の神と我々は相住居になれる理窟がない、もし門口で出合へば、是が非でも一まづ此方へ譲ツて貰はう」

「ぢやア皆その決心で、時節到來の今この機を外さず、大に氏子を増ませう、實は人間も苦しい瘦我慢を張らずに一旦、快く我々の氏子となつた上で働けば、働くに骨も折れず、身も心も軽く樂だに、何故あゝ無理な重荷を背負ひながら我々を防がうとするのかさつぱり分らない」

「全くさね、我々は鬼でも蛇でもないから、人間を取ツて食はうといふンぢやアなし、寧ろ貧乏達者にして、たゞ世間一般を氏子にしようといふだけの目的だが、疑ひ深い人間の料簡では、まだ何か外に悪い考へでもあるやうに思ツてゐるらしい、つまり貧乏になれ氏子になれといふぐらゐでは、貧乏嫌ひの奴等、いろ／＼な藝をして遁げ廻るから、かう

いふ際に否應なし片ツ端から貧乏の底へ引摺り込で、この世の中を我々の物にしなればならない」

「いくら貧乏が嫌で遁げ廻ツても、する事が福の神に見放されて我々の注文通りになツてる奴等だから、この際に少し遊團扇の風を強く煽れば、大概の家も車も秋の枯葉で、ちり／＼ぱツと何でもなす」

「今に木葉の如く我々の遊團扇に煽られるとも知らず、夢のやうな果敢ない榮華に睡ツたり、煙のやうな取り止めのない希望に誇ツたり、紙細工のやうな危い家屋敷に住んで、浮草のやうな生涯を、大盤石の如く心得てる、今日の人間ども、ます／＼料簡が分らない」

「それで我々を嫌ツたり我々を防がうといふ料簡、ます／＼以て分らない」

「いや、分らないところが我々の乗するところで、もし分られちやア大變だ、分らない間に攻め落して仕舞はう、氣が付いた時分は、もう此方の氏子だ、兎も角も我々の大願成就、さのみ勞せずして天下を取る時節が來ましたなア」

福の神

人間は互に負けず劣らず競争の絶え間なく、脛も腰も折れるほどの勢ひに息を切ツて走れど、その競争よりも更に章駄天の如く健脚にして、日夜お先へ駆け行くものは、第一まづ福の神なり、

人間おの／＼この福の神に追ひ付かむとし、この福の神を捉へむとして、一生懸命に走りながら頻りに呼べと叫べど、福の神さらに返答もせず見返りもせず、無言のまゝ後ろ手に

差招くのみ、

つまり福の神は逆も人間の駈け足を以て及ぶべからず、たま／＼福の神が路傍に憇へる時
人間中の競争に勝てる眞ツ先の奴、その不意に飛び付くのみ、

加之も福の神は其まゝ全く人間の捕虜とならず、たゞ多少の甘き物を與へて、人間これを
食へる間に挨拶もなく、また再び駈け出すものなり、

この福の神、駈け出す時に一冊の帳面を懐中より落せり、これを拾うて見れば、福の神の
規約書なり、

第一條 いかなる場合にも、いかなる人間にも、斷じて満足の幸福を與ふべからず、

第二條 まづ大體の標準は善人に與ふべし、されど只いたづらに善人と稱せらるゝもの
には妄りに與ふべからず、善人にして善事をなすの能力あるものを選び、その身分に

應じて與ふべし、

第三條 これまでに福運を與へたるところは絶えず油斷なく見廻りて、もし不都合の事
あらば容赦なく直に取り上ぐべし、

第四條 たとひ死を以て哀訴嘆願するとも、自業自得より生ずる悲惨と痛苦とは一切こ
れを捨て、救ふべからず、

第五條 たとひ無學文盲たりとも卑賤庸劣たりとも、自己の職を勵み業を怠らざるもの
は、祖先の餘慶に盡きたる暖衣飽食の徒より奪うて、これを與ふべし、

第六條 福運を得べき資格あるものにも、名譽財産、いづれか一方を與へて、名實とも
に一舉兩得の完全を與ふべからず、

第七條 生涯を通じて最後の總勘定に與ふるものと、生涯に割り當てゝ絶えず常に與ふ

るものと、その比例を失ふべからず、

第八條 運は天にありと稱し自然に来るものと心得、所謂る棚の牡丹餅を待つが如き奴の門口は、一顧も與へずして、さつさと素通りに馳せ去るべし、

第九條 たとひ油断なく働くと、あまり利欲の念に深くして、その働きよりも過分の要求をするものには、相當よりも寧ろ相當以下を與ふべし、

第十條 勤勉方直にして誠心誠意あるものは、たとひ働きの上に多少の足らざるところあるも、その足らざる點を見逃して寧ろ働き以上に與ふべし、

第十一條 いかにも努力するも、いかに奮闘するも、人に誇るものと世に奢るものは、これを與ふる時その誇り料と奢り料とを必ず差引くべし、

第十二條 奸智に長けたる悪人、もし一時の悪辣手段を以て理由なき福分を強奪し去る

時は、人生懲戒のため、寧ろ暫く其強奪し去るに任せて、悪運の強きに安心せしめ驕奢放逸に流れしめし後、一朝これを取り上ぐる場合に急轉直下の勢ひを以て世間普通の湖落よりも幾層倍の深酷なる惨憺と苦痛とを與ふべし、

第十三條 みだりに運命の解釋を試みて、これを殆ど科學的に研究し數字的に説明せむとするが如き不埒のものには、猶更ら運命の窺ひ知るべからざる變幻出液を與へ、ますます運命の捕捉すべからざる實證實例を示して、これを神祕的の迷宮に叩き込み、いやしくも人間をして運命の一端だも左右せしむべからず、

第十四條 近來の人間、動もすれば運命の寵兒といへる語を用ひ、不幸不運といへる語を用ひて、運命の公平を疑ひ運命の與奪を怪しむものあれど、疑ふものと怪しむものに何等の暗示も要せず、人間の生涯を綜合的大觀上より打算して、個々の程度と分

量に應ずべき運命の法則は、顧慮なく躊躇なく、人間の喜怒哀樂を突破して、どしどし決行し遂行すべし、

第十五條 まづ以上を大體の方針とすれど、中には運命に向うて間斷なき惡戰苦闘を繼續し、失敗また失敗さらに屈せず、いはゆる斃れて後に已むの勢ひを以て日夜に猛進し來るもの、その勇敢なる行爲に免じて斃すべからず、これ等は其活動上と其目的上に世を害し人を損せざるかぎり、たとひ自個に聊かの缺陷ありとも、寧ろ無爲無能の善人よりは遙に勝れるものとして、その欲するところの幾分は必ず與ふべし、

第十六條 たとひ人に過ぎたる善事なく努力なくとも、遺憾なく乞ふがまゝの自由自在に幸福を與へ得べきものは、

惜しむべし、わざと破りしか、綴ぢたる帳面の紙こゝに盡きて、この文字以下を記せると

ころなし、

人間の夢にも知らざる福徳の貯蓄所に駆け込みし一神、そこに懋へる他の三四神に向うて「やれく草臥れた、わけて月末に迫つてから今日といふ今日こそ、一所懸命の血眼で我を追ひかける奴が多かつた、あまり多過ぎたのみでなく、中には随分、死物狂ひに足の早い奴があつて、聊か驚いた拍子に、つい例の規約書を落した」
「や、それは大變だ、とんでもない事をした、あれを人間に拾はれては困る、さうでなくツて、近來の奴等、頻りに學者ぶつたり經驗ぶつたりして運命の研究なんか始めてるさうだからね」

「ところが大丈夫、安心し給へ、幸ひ落して来たのは控へ帳の方で、加之も最終の方から鼻紙に使つた後の残部だから、例の十六條以下は、ない筈だ、いくら慌てた時でも、やはり人間は人間さ、我々の運を缺いてまで取る事は出来ないよ」

「そりやア、さうなくツて叶はないが、草履掴みから關白になつた昔の秀吉や天下の大勢が自然と顛げ込んだ家康のやうな工合で、をりく運盗賊といふ我々の手に終へない一種の凄い奴が出るからね、うツかり油断が出来ないよ」

「しかし今日の世の中で、あゝいふ特殊の異例物はないさ、あゝいふ圖外れな奴に度々、さう飛び出されて堪るもんか、一時に我々の種切れた、まづ今日の人間では神妙に働いた力次第で身分相應より取れもせず、また此方で渡しも仕ないからね、第一あの十五條までは實のところ、訓戒のため寧ろ今日の人間に見せて置きたいくらゐだから、却つて

宜からう」

「だが萬一、十六條以下にある、たとひ人に過ぎたる善事なく努力なくとも遺憾なく乞ふがまゝの自由自在に與へ得べきものは、これくの人間だといふところを見たら今日の奴等、どうするだらう、どうなるだらうね」

「それこそ世の中が引ツくり返るよ、どいつも此奴も狂氣のやうになつて、眞面目に働く奴がなくなるね、實際あの十六條以下に列擧した條件を悉く具備して、それに當答るべき人間は今日、逆もあるべき筈なし、無論、ないに極ツてるが、すうくしさと押の強さと自惚の増長した結果、いづれも誇大妄想狂になつてる奴等だから、鷹が飛べば蒼蠅も飛ぶ流義で、自己の力も徳も顧みず、すぐそれになつた料簡と料簡が取ツ組み合うてつまり人生破壊の原因を起すに相違ない、かうせよと教へて到底その及ばざるに泣くか

或は力めて學ばんとする人間なら兎も角、さうでなく直に出來た考へだから、あゝいふところは決して見せられない、また事實に行ひ得るものは見なくつても行はんとし、若くは行ひつゝあるから、いづれにしても十六條以下の無かつたのは宜かつた、我々より寧ろ人間のために宜かつた、これが却つて今日の人間に、一列一體の幸運を授けた結果だ」

放言録

停電

交通の機關中、第一の至廉にして第一の至便なるもの、凡そ都市の電車に如くはなし、わづかの賃錢値上げに満都これがため騒ぐは、別に大なる公共的の理由あり、至廉と至便とは實際の事實上、いかなる人も異存なかるべし、但し電車をりく停電の厄に遭ふ、これも文明の機關は最も鮮明に利害の兩面を有すると共に平生の至廉至便を思うて、さのみ腹は立たざれど、今年の七月二十二日、三時間の停電に至りては、のろくと遊び半分に乘つた奴も、聊か癩癩に觸らざるを得ず、

市中、いたるところ幾百臺といふ電車の立往生、またこれ一種の奇觀たるべきも、急用を抱へて約束の時間に迫らるゝものは、もじ／＼と尻を上げたり下げたり、今か／＼と待てども待てども、さらに動かさず、よもやに引かされて、五分、十分、長くて二十分、降りると直ぐに出る平生の失策に懲りたものも、三十分以上、いよ／＼一時間近くに至りては、もはや辛抱しきれず、殆ど欺偽にでも逢ひしが如く皺くちやの切符を罪なき車掌に叩き付けて、我も／＼と飛び降りし時、俄に往來の雑踏、始めて市中の賑はしきに驚けり、人口は今日の十分一なれど、ありとあらゆる人間の足で歩きし昔の江戸の繁華を想ふ、この時の我また御徒士町に於て停電の立往生に逢ひしが、寧ろ車中たゞ一人の快に堪へず、かういふ組立の家を此まゝ大道の中央へ置き据ゑて、世間の奴等が不平たら／＼駈け歩く中で好きな本でも讀めば面白からうと、窻越しに左右往來の織るが如き雑踏を見物しながら、

さらにもまた感ずるところあり、

電気作用によりて動く電車が電気作用によりて停止するは、敢て珍らしからず不思議ならざれど、もし人間に停電なるものありとすれば、その光景は果して如何、

青天白日の下、満都幾百萬の生きた人間、びたりと一時に活動を休止されて、いづれも往來に釘付の人形となり、歩く事も動く事も物いふ事も出来ず、手を舉げたものは手を舉げたまゝ、足を踏み出したものは足を踏み出したまゝの状態、振り返つた奴は首を捻ぢたまゝに向き直れず、鼻を掴んだ奴は鼻を掴んだまゝに放れず、ばち／＼と目ばかり剥いて千差萬別の異形異體、いかに面白きぞ、運わるく借金取に出喰して其まゝの睨み合また妙ならずや、おもはぬ美人と不意に向ひ合せて暫し互の停電これは更に妙なるべし、乃至また掏兜が時計巾着の類を盗んで遁げも出来ず追ひかけも出来ず、摺れ違ひに雙方より身體を

斜めに氣を揉む體、いかにも奇ならずや、現在これを目撃しながら手も足も出ぬ巡查さらに呵しからずや、あんどり口を開いたまゝの奴は砂塵を眞正面にうけて胃を害すべく、もし下駄の鼻緒でも切れて俯いた奴は俯いたまゝ脳病を起すべし、また家にあるものを想像すれば、ちよいと寝轉んだ奴の其まゝ立てざる工合、急用ありて外出の途端その門口を跨いだまゝの立往生、腕を組んだ奴は組んだまゝ思案抛首も其まゝの狀態、夫婦喧嘩の掴み合もあるべし、慾得の取ツ組合もあるべし、食時の場合に茶椀と箸を口元まで持ち上げて食へぬ面相、待合料理屋に盃を手にしたながら藝妓に戯けたまゝの有様、いたるところに人間種々のあらゆる奇を演ずべく、中にも厠に這入つたまゝの三四時間これには一番閉口すべし、外科療治の醫者が刀を持つたまゝ動かさずして切開されたまゝ捨て置かるゝ患者これは堪つたものにあらず、たゞ喜ぶものは演劇に好きな俳優の顔を穴のあくほど見る浮氣女

と面白き活動寫眞の見物ぐらゐなり、

以上は只これ一時の馬鹿けたる想像なれど、或意味に於て、正しく人間の停電なるものあり、

あくまで活動すべき約束の下に生れたる人間にして、いまだ死せざるに何等の用なく殆ど死人と等しきもの、これを人間の停電といふ、

衣食住に窮せざる親の子と生れたるを幸ひ、或は其家を嗣いで一家の主人となり満足の五體を持ちながら、社會の存在に一の貢獻なく奮勵なく自己の生涯に一の修養なく意義なくいはゆる醉生夢死の徒、これが即ち停電野郎の標本なり、動もすれば生活問題に追はれざる階級中、この停電野郎は頗る多し、

自然の老朽を定則とせる世の中に不自然の若朽者、壯年血氣の年輩にして孫を失へる隠居

老爺の如くに凹垂れる奴、一事一物の難に戦き恐れて衰蟲の如く居縮む奴、奮闘の餘地を見出し得ずして眼前の悲哀に人生觀を履き違へたる自殺者、いかなる貧苦の底にも艱苦の奥にも人生の樂天地あるを知らずして狼狽眼に世を呪ひ人を恨みつゝ終生を半泣きの濫面に送るもの、その他いづれも卑怯と愚癡に埋もれて人間の希望と活動とを失へるもの、皆これ腦力休止の停電野郎なり、

もし何物か人間外の高きところより見渡せば、うよ／＼とせる無數人間の無用物この停電野郎の多きに驚くべし、加之も往復たつた九錢の電車たまたま一時の停電にあらず、どんな奴でも身分相應それまでに尠からぬ生活費のかゝつた人間の停電にして、其まゝの往生また再び發車せざる點、いかに不經濟にして、いかに憫れならずや、

歐洲の列弱

社會に用ひらるゝ成語なるもの、頗る注意を要し、をり／＼事實に照らして改正せざるべからず、道德論に立脚せる聖賢の語も猶かつ時代の趨勢に従つて多少の動搖を來し、一貫せる萬古不易の力に乏しき點ありとすれば、たまく／＼一時の附和雷同に呼び馴れし成語の久しきを保たざるは、固より當然の理にして、天下を風靡せし攘夷の一語も、尊王の實を擧げて維新の革命を促せし後、さらに何の用なく、近くは新聞に雜誌に多年の人口に膾炙して一の成語となりし歐洲列強の文字も、獨逸一國を敵として聯合軍の連戦連敗、これを列強と稱すべきか、正に是れ歐洲の列弱なり、

最後の勝敗いづれに歸するとも、その勝敗を決するまでの間、たしかに歐洲の列強にあら

すして列弱なり、もし露骨に告白すれば、既に聯合軍といへるもの、聯合せざるべからざる上に所謂る烏合の衆の弱きを意味し、これと反對に一國を以て殆ど世界を敵とするもの勢ひ他を頼まざる獨力奮闘の強きを意味す、たとひ勝敗は五分五分たりとも列國の列弱たるを免れず、たとひ七三の終局を見るときも、三分の獨逸は七分の列國よりも戦ひの權威に於て正しく勝てり、もはや獨逸をして再び立つ能はざるに至らしむるも、もはや列國は再び列強の成語を以て誇るべからざる理由あり、到底その事のあるべき筈なきも、慄むらくは只この列弱中に異彩を放つべき一強國の我兵をして縦横無盡に突貫せしめ得ざるのみ、されど萬一もし我軍をして思ふまゝに奮闘せしむれば、敵に顔色なきのみか、味方にも顔色を失うて、ますく列國列弱の證據歴然たる氣の毒千萬に立至るべし、

麻羅の解

麻羅とは梵語にして、佛道修行の障礙となるべき惡魔外道の事をいふ、麻は天魔の魔にして羅は羅刹の羅なり、惡魔、羅刹、夜叉、外道、破旬、いづれも善法を破り正法を亂すため、情慾を禁すべき僧徒に取りて第一の障礙物、即ち墮落女犯の原因たるべき陰莖を麻羅といふに至れり、されど世俗これを傳へて一般に男子の陰莖を麻羅と總稱するは甚だ當らず、この理に於て男子の陰莖よりも寧ろ女子の陰門に最も恐ろしき惡魔外道は潜めり、さらに今日の語を以て男女兩性の生殖器といへば、種族繁榮の基にして社會の向上進歩た之に伴ひ、惡魔破旬どころか、いはゆる神聖の戀も愛も只これ這個の消息にありといふべし、のみならず僧侶なほ公然の妻帯を許さるゝに世俗一般の男子いまだ麻羅を以て稱す

るは、大切なる自己の物を侮辱せるもの、これに反して世間これを珍寶と呼ばしめしは
いづこの洒落ものぞ、頗る要領を得たり、

握手

近來、いたるところに行はるゝ握手の禮は、何事もバタ臭きを以て誇れるハイカラ者流、
これまた西洋の文明より來れるものとすれど、そもくこの握手は殆ど古今東西の敬愛を
表せる共通的の業なり、わけて我國は最も遠き神代の古に於て行はる、神代紀にいふ(陰
先唱日、姫哉可愛少男乎、便握)これを平たくいへば、天降りし二柱の神あり、女神まづ男神
の手を握りて契り給ひしより、此やまと島根を生み出し給へる建國の握手ありしのみか、
萬葉集にも(さ檜のくま檜の隅川の瀬をばや)流れの早瀬を渉るに言寄せて敬愛の念を固き握

手に籠めたり、また韓退之の柳々州碑文に(今夫平居里巷相慕悅、酒含遊戲相徵逐(中略)握手
出肝膽相示、指天日涕泣、誓生死不相背負、云々)
以て漢土にも握手の風習ありしを知るべし、豈それ近くキヤベツやサラダの種にへバリ付
いて來りしものならむや、

加之も清く朗かに質朴なる古の握手は五の眞心より出で、誓約の固きを意味し、今日の握
手は親疎に拘はらず只これ人前の形式一片お世辭半分の挨拶に用ひらる、手を握らうが足
を掴まうが一時その場かぎりの事、抱き占めて首ツ玉に嚙り付いても放せば忽ち路傍の人
空恍けて振り返りもせず、そんな事をした覚えなしといふべし、

南洋土人の一部には鼻と鼻とを突き合して禮とし、西藏人は兩手の拇指を前に揃へてペロ
リと舌を出す敬禮なりといふ、

腹背面従、いたるところ今日の如くワザく手を出して誠意なき虚禮の握手頻々たるより

は、懐手のまゝ互の鼻と鼻とをカチ合せて禮となすの面白きに如かず、鼻の低い奴は宜しく額と額とをブツケ合ふべし、せめて痛い間は雙方より其人を忘れざるべく、途中不意に出喰はしてペロリと赤い舌を出す如き猶更ら妙なり、ステーションの送迎その他の宴會に於ける席上、堂々たる紳士諸君と婢娟たる令夫人令嬢が一時に拊指と舌を揃へて敬禮を表する光景いよく妙ならずや、

もし握手を簡單に便利なりとすれば、握手よりも目禮さらに簡單便利なり、もし形式を尊べば、互に手を觸れずして海陸の軍人に於ける擧手の禮さらに簡便を得たり、

されど握手の禮を以て悪手段とするにあらず、今日の握手は明日の仇敵、あまりに誠意なくして、あまりに輕佻浮華なるが故なり、一國を代表せる外交上の握手は別として、ろくでもない奴が出合頭の流行的に手を握り合ひ、満身の敬愛を捧げますと齒の浮くやうな事

を吐す面相、見て居れるものにあらず、就中、半獸的を以て人間の本能と心得たる今日の青年男女が手當り次第の握手に至りては、言語道斷、沙汰の限りといふべし、

奇習

奇習は他より見ての奇習にして、奇習を常とせるもの奇習にあらず、寧ろ却つて其國の誇るべき美容術とせり、

西洋婦人の細腰と、支那婦人の纏足と、日本婦人の内股を寄せて内輪に歩むと、この三大奇習、これを雙方より互に見れば、猿の尻笑ひと一般、天下これほど馬鹿げたものなし、西洋婦人が生れながら蜂の如く腰の細きものにあらず、支那婦人も生れながら足の腐れて縮まりし不具者にあらず、日本婦人また赤ん坊の時は男子と同じく外輪なり、それを殊更

ら各々その國の風俗習慣に従うて、胴體の中央より上と下とにチギレさうな細腰を貴び、足の指も踵も押し曲げてヒヨロ／＼と五體の保ち兼ねたる姿を窈窕と喜び、まツ直に歩むべきをワザと内輪に歩ませて優美とせるが如きは、殆ど人間を玩弄物にせる不自然の極と云ふべし、

されど風俗習慣また悉く無意味に來らずとすれば、満足に歩けぬ支那婦人の纏足は外出を禁ぜし國風の結果といふべく、日本婦人の内輪は腰より以下の開放し易き衣服の關係上といふべし、たゞ西洋婦人の細腰に至りては、その細腰を美とせる形容以外、そも／＼何の理由より來りしか、まごか抱き付く時の手がかり能きためにもあらざるべし、いづれにせよ、時代の覺醒は漸く不自然の習慣を破りて、支那婦人の纏足は次第に解かれ日本婦人また今日女學生の袴と運動のため次第に將來の改良を促さる、獨り西洋婦人は依

然として蜂の如し、最も衛生を重んずる國風に最も不衛生の愚を極め、最も自然を愛する聲の下に最も甚だしく生來の自然を枉げ、ぎゆう／＼腸を締め付けて臍腑を縮小し、ますます腰を細くして胸と尻との飛び出すを厭はず、これを衣服の圓錐形に隠して男子に靴の紐を結ばせ、意氣揚々として交際場裡の花と呼べる、

西洋婦人の西洋男子に花と呼ばれ蝶と愛でらるゝは可なり、御勝手次第の事なれど、いやしくも日本男兒として猶かつ其細腰に隨喜渴仰するもの多く、いづれかといへば寧ろ害の深からざる自國婦人の内股と内輪を笑はれながら、不自然の愚を極めし彼等の細腰を笑ふの權威なく勇氣なく、徒らに蜂の胴を以て世界美人の標本的と心得、さらに一點の批評眼も判断力もない意氣地なしの卑屈野郎あり、

長所は野蠻人の長所も取るべし、短所は文明國の風俗習慣も一喝の下に唾棄すべし、日本

男子の禮服にシルクハットと燕尾服を用ふるがため日本婦人の白襟紋附を廢すべき理由いづくにある、たとひ日本婦人を擧げて洋装せしむるに至るも、自然の姿勢を整へ得るまでの間、丸行燈の如き胴體と石臼大の尻とを遠慮なく振り廻すべし、咄々、好きな鰻を貰うたから嫌な蛇も貰はねばならぬといふ義理、どこにありや、

大膽

我に於て最も大膽なりと思へる事も、これを他人に取りて殆ど朝飯前の仕事に等しき事あり、他人また最も大膽と誇れる事も、これを我に取りて屁とも思はざる事あり、蓋し大膽は其人と其時と其事の關係問題と程度問題なり、此に於て我これを今人に求めず、歴史上の古英雄中、その傳記と事業とを比較して最も大

膽不敵なるものを求めしが、たまく他の一書を読んで啞然たり、書中の一節にいふ、初めて海鼠を食ひし男と初めて顔に白粉を塗りし女とは最も人間の胆なるものなりと、なるほど武將として百萬の敵に恐れざる大膽よりも、ぬらくと薄氣味わるく正體の分らぬ海鼠を初めて食ひし男は頗る大膽なり、いかにも火水の中に飛び込みし女よりは、初めて顔に白粉を塗り白晝平氣に出歩いた女は頗る大膽なり、

監獄の内外

監獄の囚徒、そもく悪人なりや善人なりやとの問題を以て世間に向へば、殆ど相手にするものなく、氣の早い奴は人を馬鹿にするなと横面の一撃ぐらゐ喰はし兼ねざるべし、されど監獄に投ぜられたる罪囚、悉く世の中の悪人のみなりやと問へば、今日多少の知識

階級に屬せるものは聊か首を傾けて、手軽く卽座に卽答し得ざるべし、また監獄に囚はれつゝある悪人の數と、監獄以外の社會に免れつゝある悪人の數と、いづれか多きやと問へば、無論いふまでもなく、かぎりある監獄内よりも廣き社會に悪人は多しと答ふべし、たゞ捕縛せらるゝと捕縛せられざるのみ、この理を以て監獄の罪人を恕すべからざるも、監獄以外の社會に囚はれざる悪人の寧ろ多きを思へば、罪に服して囚人となれるものよりも、罪に服さずして社會の表裏に隠顯出沒せる奸惡の徒ますく憎むべし、さらに監獄の囚人は、社會より既に刑罰の目的を達せられたるのみならず、その身また過去の罪を悔い現在の涙に泣いて改過遷善の域に進まむとするものあれど、監獄以外に於ける悪人は、巧みに法律の網を潜り縦横に他人の弱點を覘ひ自在に警察の目を偷み、盛に世

の中を害毒して内心その囚はれざるを誇れるもの、加之も無智文盲の徒にあらず飢渴災厄に迫りし貧苦の餘儀なきためにあらずして、寧ろ幾何の地位あり餘裕あり門戸姓名を張るものに多きは、社會組織の缺陷か法律行爲の不備か、いづれにせよ、事實に於て正しく今日の状態なり、昔の或名僧、往來の乞食を見る毎に必ず合掌禮拜して、この人達は正直なるがため乞食となれり、もし不正直の悪人ならば盜賊ともなりぬべしといへり、我また監獄の門前を通る毎に云はむとす、あらゆる階級を通じて絶えず隠れたる犯罪の行はるゝ今日、たまく捕へられて世間悪人の代表者となりし諸君は、いはゆる年貢の納め時その罪に於て不幸と稱すべからざるも、平氣に免るゝ奴の多き上より見れば、その運命に於て、實に氣の毒の至りなりと、

美人

いづれの世にも美人は美人なれど、世間一般に稱せらるゝ今日の美人なるもの、うかく、その美に仕てやらるべからず、よほどの割引を以て見ざれば、とんでもない買ひ被りの恐れあり、

元來この女といふもの、みだりに外出を許されずして殆ど幽閉的に押し込まれし昔より、男に對する技倆のみは頗る發達し、就中、容色を賣り付ける業には最も拔目なく遺憾なく全力を盡して今日に至りしが、その今日は更に進歩せる人工的色彩の美容術を以て自由なる交際場裡に出入するがため、ます／＼男の目を誤魔化す業に長じ、男また半獸的情慾を以て誤魔化され易く、加之も第一は近眼者の多き今日、どれを見ても女は悉く美人な

り、

女に二三割の巧妙なる懸値ありて、男に二三割の薄惚い買ひ被りありとすれば、いたるところ往來にも電車にも今日は美人の多き筈なり、

今日の如く研究せられたる美容術を施して今日の如く狼狽へたる男子眼に映じながら、さのみ美人と見えざる女は、よく／＼の醜といふべし、

最も公平なる眼識ありといはるゝ新聞記者さへ、いづれかに女の死骸を見れば、忽ち筆を執つて翌日の紙上、驟死美人と稱し水死美人と稱するにあらずや、

まして況や無事息災に生きて動ける女が、あらゆる手段を講じて満々たる虚榮心を發揮しあらゆる犠牲物を拂うて得々たる粧飾品に光りを放ち、俳優の舞臺面に於けるが如き種々の表情を盡し、孔雀の羽を擴げしかと思はるゝ色彩の濃艶を以て、色餓鬼の亡者に等しき

男子を抱擁せむとす、さらぬも女の尻を喫いで歩く奴、堪つたものにあらず、この流の加工的美人ますく多く、この流の半獸的男子いよく多く、兩々こゝに相接觸して申譯の都合よき戀愛説を實行し、實行せられたる戀愛説また一時その場かぎりの發作的とすれば、お互に正體を現はして雙方お座の醒めるは當然の結果なり、たとひ夫婦となりても長持のすべき筈なく、いや玩弄せられたとか侮辱せられたとか、その始めは自己等の勝手に内々そつと抱き合ひながら、今更ら他人の知つたやうに各その不足を世間へ持ち出し、臆面もなく離婚の損害のと騒ぎ廻る奴、頗る多し、男にも色魔と稱せらるゝを無上の光榮とし、コスメチックや香水に身を委ねて懐中鏡を放さず寝白粉までする奴あれば、美を生命とする女に誤魔化し細工のあるは決して尤むべからざるも、今日の男女間に聞かぬも忌はしく馬鹿々々しき葛藤紛々の絶えざるは、結局、

あまりに天真を没却して本來の木地を隠すの美容術に長じ過ぎたるがためなり、今日の男女間に徳義を重んじ修養を尊び人格を選り精神上の美醜を論ずるは寧ろ野暮の極なり、今日の男女間は只これ活動寫眞の如く一時の眼底に映せる外面の美醜論を以て相當なりとす、加之も外面の美それ斯の如き案外の手細工ありとすれば、うかく慌てゝ早まるべからず、とツくりと真正面より穴のあくほど見極めて而して後、十人十色そこは勝手次第お好み次第にすべし、

たゞ氣の毒なるは懸値も細工もない天生の美人にして、その美の領分を世間一般の人工的に蠶食せられ、その美の權威を世間一般の比較的に薄く狭められ、その美の眞價を段々と引き下げられて、勢ひ自然に頗る損の世の中となれり、されど囊中の錐は自ら現はる、今日いまだ半獸的の近眼者のみにあらざるかぎり、天生の

美人に最後の勝利は歸すべし、乞ふ安んじて自重せよ、あたら駿馬の狼狽へて癡漢を乗する勿れ、

停車場

同じ人間の我一人として、多數の人間が餘儀なく集れるところを面白半分の見物かたぐのこく出かけるは失敬千萬の業なれど、凡そステーションほど世態人情を見るに手近く便利なるものなし、またこれ一種の人生觀なり、
郊外の散歩、市中の逍遙、ぶら／＼用のない身を運ぶに妙なれど、をり／＼家にありて徒然に苦しむ時、ステーションに紛れ込んで悠々と杖を引きすり其の煙を吹きながら、混亂雑踏せる種々の人間を悉く我想像界に入れて自由自在の材料に取るの快、また頗る妙なり、

いかなる人間も發車時間に迫らるゝ一刹那は、人生の平然安居といふもの自然に奪はれ、おのづから面上に多少の狼狽へ氣味を帯びて、きよろ／＼とせる眼を異様に光らせ、それは／＼とせる身の無遠慮に人を押し退け掻き分け、我劣らじと鼻の穴を廣げ口を結びて突貫的に進み行く勢ひ、たしかに足の運びは平生の三倍以上なれど、その足よりも面は猶更ら前に突き出して、ちよいと觸れば直に倒るゝ傾斜的態度を以て、潮の如く一方の開札口に向ふ、加之も開札口は一人づゝなり、社會の競争も亦これに類せずや、生活難に迫られて利を追ひ職を求めつゝ日夜に狂奔せる状態、ステーションの一刹那に於けると何等の差異がある、但し實際上に約束の時間勵行のみは、今日の人間その正反對なり、
發車時間に迫らるゝ一刹那の光景よりも、開札口に押し寄せて向ふ群衆の慌て加減よりもさらに觀察上の廣く深く興味のおきものは、待合室に於ける有形無形の千態萬狀なり、

人間その家を出で、旅行といふ名稱の下には、人生の波瀾曲折を意味すると共に、また必ず利害得失の數を含み喜怒哀樂の情を含む、この利害得失と喜怒哀樂の情とを掻き集めて一室に押し込めるもの、即ちステーションの待合所にして、時々刻々これを一汽車づゝに積んで吐き出すこと日に幾度、もし人間を支配する運命の神あらば、こゝが最も第一に急しく忙しきところなるべし、

妻子を伴ひし富豪の別荘行、思ひ思はれし若き男女の新婚旅行、得意の事業に東奔西走の繁忙を極むるもの、多大の希望を抱いて遠きに行くもの、何等の顧慮なく束縛なく趣味の上より名所舊蹟を探らむとするもの、金と暇とがあり過ぎて病氣でもない身を氣樂な温泉めぐりに運ばむとするものの類、以上いづれも一二等の客に多く、人生これ快樂の部なれど、三等待合の片隅に營養不充分的顔色を傾けて惘然と脚を組めるもの、定めて懷中は猶

更の不充分に行先の目的いよく覺束なき體、ありくと浮世に追ひ落されし悲惨を見るべく、その日稼ぎの夫婦が三四人の子を背に負ひ手に引き連れて、同じ賃錢を拂ひながら人の影に潜みつゝ遠慮勝に淋しく時間の來るを待てる體、いかに涙の多き旅なるべきか、容貌も風俗も賤しからぬ女が小包みを膝に抱へしまゝ思案の襟に顔を埋めて臉の脹れしは、どれほどの辛い別れに泣いて何處の空に身の運命を委ぬるぞ、其他あらゆる人間さまざまの境涯より限りなく産み出せる喜怒哀樂を自然の表情に盡して、只これ一目の下に無言の告白を呈せる種々の状態、數百冊の小説を讀むよりは遙に勝れり、

さらに緻密なる觀察力を以て、秋官の罪人に接するが如く仔細に看來れば、その容貌に關し、その風俗に關し、その一顰一笑、その一舉一動、その一言一句、その携へたる風呂敷包も、その鞆も柳行李も傘も杖も乃至また手にせる新聞雜誌も口にせる煙草の種類に至る

まで、悉く皆これ人生境遇の階級に應じ若くは寧ろ反對方面の何物をか現はせる證據にして、趣味の上より連續的に想像を逞しうすれば、いかに名作たりとも殊更に仕組まれたる演劇よりは頗る面白く、加之も自由自在に何時たりとも見物料は無價なり、

世間は廣しと雖も、つい簡便に手近に一文入らずの運動かたぐい、これほどの變化多く興味深き人生の一大パノラマあらむや、

平氣に一二等の待合室へ澄まし込んだ男の赤切符を落して面まで赤くする奴あり、わざと他人の如く別々に腰かけながら絶えず目と目を放さぬ事情付の男女あり、禿頭の老爺が孫に等しき女を連れて何處へか忍び旅行の元氣旺盛あり、堂々たる反身の紳士が發車間際に高利貸より探し出されて目を白黒の無言に恐縮するあり、追手を誤魔化し損ねて汽笛一聲と共に引戻さるゝ放蕩息子あり、見苦しき割前勘定より衆中で掴み合の喧嘩する奴あり、

その他さまざまの滑稽餘興また妙からず、いづれの點より見るもステーションは社會百級の生ける縮圖なり、

されどあまり毎日これを面白半分に分れ込めば、驛夫に顔を覚えられ見張の巡查に怪しまるゝ恐れあり、のみならず興も味も薄し、をりゝそのステーションを變へて、たまゝ出かける感想の深く新なるに如かず、
人事繁忙、暇なしと雖も、のろゝと寝轉んで家に無用の書を読み無用の客と無用の雑談に耽るもの、何ぞ門外一步の氣を轉じて、千差萬別の状態を盡せる實地の現象、この世間學の面白きを看取せざるや、

秋

秋は萬物うち沈みて、あはれに悲しきものといふ、秋の字の下に心の字を加ふれば、其ま
ま直に愁となる、憂愁の熟語、古來この秋は猶更ら世間の人心を陰鬱に閉ぢ、うたゝ秋風
蕭殺の感を深からしむ、

春夏秋冬の四季その語源を求むるや、春は(張る)にして事々物々さらに張り出づる草木出
生の義より來り、いはゆる陽氣の天地に張れるを意味せるもの、夏は熱より轉化し、炎熱
の暑きがため、またあつしの(あつ)より轉ぜしともいふ、古事記に夏高津日神の稱あり、
秋は(飽き)なり、米穀菓物の成熟して飽きるほどに満てるをいふ、この瑞穂の國に幸多き
を謳歌して秋津洲といふも、米穀の稔れる豊饒の意味を現はし、冬は(冷ゆ)より轉化して
満目荒涼の寒き名に起れり、

以上この義を以てすれば、秋風蕭殺の文字さらに當らず、我神祖の百穀豊饒を壽ぎ給うて

千五百秋瑞穂之地と稱せられし意味には、いよく當を得ざる不敬の極といふべく、實際
また人間の生活物を收穫すべき幸福歡喜の時季を呪うて、この秋は涙多き人生悲哀の時と
せるが如きは、世間に用なき自己のみ只その眼前に落葉寂寞の感深き詩人の泣言なり、こ
の秋を物あはれに悲しき時とせるは、うかれし春の花に未練を残して草葉の露と蟲の音に
心細く打沈める歌人の世迷言なり、

いかに秋の月は冴えたりとも、冴えたるがため何の悲哀かある、寧ろ皎々たる秋夜の満月
に對うて人間満心の曇りなき快活の氣魄なほ月明の如くなるべし、天地の自然を樂しむ風
流の眞髓、動もすれば由來この閑人の詩歌に過られて、半狂的に無用無益の文字漢となる
もの多く、半病的に薄志弱行の意氣地なしとなるもの多し、

古人の詩歌に接するもの、感唱以外、まづ其古人の時代と境遇と人物の如何とを考ふべく、

さらに自己の詩歌は自己より出でて古人の糟を嘗め古人の涎を吸ふべからず、無線電信に戀を通じ飛行機に新婚旅行を企てむとする今人は、宜しく今人の時代と思想に觸れて吟詠すべきを、鹿の音に泣き蟲の音に泣きし古人の一たび秋を悲しといへば、催眠術にかゝれると一般、秋これ悲しきものとなりて、秋に關する文字は悉く亡者の恨み言に等しく、いづし露けき袖に濕り勝なる陰鬱的の悲哀となり、芒尾花の招くも化物と見るに至る、もしそれこの秋を人生に譬ふれば、青年は草木の萌え出づる春の如く、壯年は血氣の焔々たる夏の如く、老衰は萬物こゝに畏縮する冬の如く、人間の生涯中、最も圓熟せる用意と最も充實せる智慮を以て事に當り事を爲すべきは、いはゆる中年の四十歳以上にして、正に是れ秋なり、人間この生涯を通じて遺憾なく活動すべき此秋の全盛期を空しく泣いて徒らに悲しむもの、そもく世の中に何の用かある、

朝夕の秋風に驚いて、裕の質受けに全力を注ぐが如き奴は、寧ろ却つて罪なし、受け出せずば單物より綿入に一足飛の勇あれど、さも高尚らしく秋を悲しみ、さも學者らしく秋の來るを歎じ、いかにも風流らしく秋に泣く徒輩は、聊か人間の仲間を外れて、殆ど一種の悲鳴器となれるものなり、

秋それ何ぞ憂愁寂寞の基たるべき、時節に於ては天地晴朗と共に穀物果實の豐饒なる成熟期なり、人間に於ては心氣爽快と共に思慮分別の圓滿なる全盛期なり、

蚊に贈るの文

夏の夜や蚊を瑕瑾にして五百兩、もし蚊がなくなれば夏の夕暮を一刻千金の春に比すべきも、蚊のために半分を削られて五百兩といへば、つまり蚊に残金五百兩の價ありといふべし、

人間に三文の價もない奴が、うよくくと蠢動せる世の中に、見る影もない一小蟲の蚊として五百兩の價は、實に大した手柄なる哉、
 我の始めて家を持ちしは、向島の奥なる白髯の森影にして、今は下谷の根岸に住めり、前後二十幾年、いづれも蚊の名所を以て聞えたる所、實際また蚊軍の襲來その勢ひは頗る猛なれど、これに對する我も次第に馴れて驚かず、或意味に於ては我と蚊との間、いつしか段々と交際よくなれり、その或意味を更に解釋すれば、まさか蚊の方でお馴染甲斐に遠慮して螫すがためにあらざるべきを、螫さるゝ我は絶えず自然に皮膚の抵抗力を養ひし結果、一種の慢性的となり癩鈍性となれるが如し、
 こゝに於て我この蚊を見ること、さのみ仇敵の如く憎からず、寧ろ一面に其勇氣を愛し其奮闘を稱し其機敏なる活動振に感じ、つい一場の戯れでなく謹んで蚊に呈するの文を作る

文と蚊これ同音にして、その字形を解けば、虫に贈るの文また自然の縁なきにあらず、
 文に曰く、

蚊君足下、足下と僕とは一朝一夕の交りにあらずして、實に二十餘年の長きを、形影相伴へる親密の間柄なり、足下の萬事に付いて豈それ他人の如く水臭きものならむやされど世人の足下を忌み嫌ふものは、みだりに足下を以て夏の夜に於ける第一に煩き害物とし、また神經過敏に足下を恐るゝものは、足下を以て種々なる病源の媒介者とし、甚だしきは足下の口に元來の毒液毒汁ありて、之を人體の創口に注入するものとし、昔より在來りの蚊遣火と蚊遣線香とを以て足れりとせず、今や除蟲菊に製造せられたる幾種の驅逐法以外、さらに進んで、多々ますゝ足下の不利益物を案出せむとす、油斷大敵、足下たるもの、宜しく警戒せざるべからず、

放言録—蚊に贈るの文

多年の馴染を重ねし我は、ゆるやかに團扇の風を送りて、静に敬遠策を施す以下、いまだ足下等に對して、世人の如く残忍冷酷の手段を取らざりしもの、他なし、世人の足下を見ると大に同じからざる點あればなり、

そもく足下等の生るゝや、濕地の水溜り乃至また泥溝の中に産下せられ、その卵の化して發育せるもの子となり、跳ねるが如く踊るが如き浮き沈みに絶えず間斷なき活動の結果、やうく蚊となりて薄闇き樹木の間身を潜め、植物の液汁を吸ひつゝ時の來るを待ち構へ、初夏の候、そろく出でまづ人家の軒端に迫り、盛夏の候、夕暮に乘じ夜に入りて俄に啞喊襲撃するに至るまでの間、その經歷の幾變遷は寧ろ惘然と生ける人間よりも遙に勝れり、

ましてや叩けば直に潰れ、吹けば忽ち飛ぶべき軟弱纖細の身を以て、王侯貴人にも恐

れず英雄豪傑にも屈せず、人間の生血を吸ふ大膽不敵は、實に其勇を稱すべく、勇ありと雖も敵すべからざる煙に身を避けて屋外へ遁るゝは猪勇にあらず、人間安眠の城廓とせる蚊帳を張らるゝ時、その出入に乗じて巧みに忍び込み、或は縫目の綻びを探し歩き穴を見付けて進入するは、その智を稱すべく、團扇の音に去り扇子の止むに來るの進退掛引は、その機敏を稱すべく、人の悪い奴は、わざと刺させて置いて不意の欺し討にする事あれど、いざや足下の刺さむとする時は必ずブンと名乗りかけて卑怯の振舞さらになく、たましく血を吸ひ過ぎて急に飛べず遁げられず、その場に見苦しき最後を遂ぐるものあれど、まづ勢揃へに蚊柱を立て盛に軍を起して奮闘する時は、遣へども拂へども屈せず撓まず、努力のあらむかぎり盡して、味方の死骸を飛び越えつゝ立ち替り入り替り、前後左右より人間を惱ます勢ひ、遺憾なく堅忍不拔の性を

現はして痛快の極といふべし、

白状すれば我々の人間社會、却つて足下等に恥づるもの多く、出来る事なら人間仲間を弾き出して、思ふ存分、五體に血の氣のなくなるまで足下等の餌食にしたい奴は随分あれど、いまだ蚊に食はれて即死せしものなきがため、螫されながら安心して足下等を馬鹿にし、うるさく困りながら足下等を輕蔑するの極、瘦せこけた意氣地なしを蚊のやうな野郎と稱するに至る、

されど夙に足下等の努力奮闘を快とせる我は、寧ろ蚊のやうな野郎の黠きを歎ずるのみならず、實は堂々たる大兵肥滿の男に生れながら、逆も足下等に及ばざる野郎の多きを似て面目次第もなしとするものなり、

嗚呼、蚊君足下、お世辭にあらず、おべツかにあらず、また今後ますます〜お手柔かに

願はむとするにあらず、あまり我々人間仲間にも憫れ果てた奴の多きを慨し、猶更ら足下等の活動振に感ずるところありて、聊か一言を呈するのみ、

この一文をなせし時、傍に妻あり、いかにも馬鹿々々しいといはぬばかりの顔色、今夜から主人だけ蚊帳は入りますまいと、生憎その今夜に限りて蚊君の襲ひ來るや最も多く頗る激し、妻また皮肉に云ふ、これは定めてお禮に來るンでせうねと、

已むを得たし

已むを得ざるの語は、いたるところ常に絶えず萬口一致に用ひらる、されど已むを得たり

の語、あまり多く用ひられざるは何ぞや、

蓋し勢ひ已むを得ざることのみ多くして、勢ひ已むを得たることの尠きためか、

放言録—已むを得たし

勢ひ已むを得ざるの大なるものは、國と國との戦鬪を起し、勢ひ已むを得るの大なるものは、英雄豪傑の士、事に當りて奮闘の極、死して已み斃れて後に已む、されど今日の世間、さらに用ひらるゝものは、實際の已むを得ざるにあらずして、自己の都合上、その場の出放題、ごまかし半分の申譯に已むを得ざるなり、
 つい友達に誘はれて已むを得ずあゝいふところへ出掛けたよ、ねエ君、踏み倒す氣もないが返す事の出来ない時は已むを得ないぢやないか、約束は約束だが已むを得ず反いた、悪い事は悪いが已むを得ず欺した、已むを得ず遁げた、已むを得ず飲んで仕舞ったぐらゐの程度に於て、勢ひ已むを得ざるなり、甚だしい奴は自己から女を追ッかけ廻して居ながらどうも彼女には已むを得ないなどゝ吐すに至る、實は今日の已むを得ざるもの、いつ何時でも已むを得て差支のない事のみなり、

凡そ人間の生涯中、進退こゝに谷りて已むを得ざるほどの大事は、さう幾度もあるべき筈なく、もしあれば第一に生命の續かぬ筈を、平氣に澄まし込んで事々物々お手軽に連發し口を開けば直に勢ひ已むを得ずといふ、その勢ひの尻に似たるを知るべし、騎虎の勢ひといへど、實は豚の尻にも付き兼ねて、のろゝとせる氣ぬけの工合を想ひやるべし、願はくば人間、いかなる不意の難事に出喰はすとも、泰然自若として已むを得たし、たとひ餘儀なき場合に迫るも、餘裕綽々として餘儀ありたし、事に處して餘すところなく、世に對して疚しき點なく、人に向うて未練なく、死に至りても憾みなきは、するだけの事を仕遂げて後、皆この已むを得たるが故にして、人事を盡し人力を盡せる信念の上に、已むを得ざる筈なし、
 已むを得ざるの語、これを猶豫なき嚴格に論ずれば殆ど人間の不可抗力に對する意味なり、

人間の力を以て抗し得べき範圍内に於て恐らく已むを得ざる場合は妙し、たとひ多少の已むを得ざる場合ありとも、これに打克ち、これに抵抗し、これに已むを得て始めて人間の努力せる權威あるにあらずや、

今日の世人に於ける十中八九、その已むを得ざる價值を見れば、必ず訪ふべき人を電車賃なきため訪ふこと能はざるぐらゐの已むを得ざるなり、ぐづくせず達者に持前の兩脚を以てすれば、すぐに何でもなく容易に已むを得べし、萬已むを得ざる場合といふも、奮起すれば人間の精力上、たゞの一遍か二遍で埒が明いて已むを得る場合多し、近來、あまり已むを得ざる語の無意味になりし極端は、噴アを持ツて已むを得ず子が出来たといふ奴あり、全體、どういふ工合に已むを得ざりしか、

辭 世

古往今來、人の死に臨みて發せし辭世の詩歌を集むれば、わづかに一人一題とするも、積んで山の如く、實に意外なる一大書冊となるべし、

但し人の將に死せむとする其言や善しとの理を以て、この辭世なるもの悉く是れ人間最後の琴線に觸れしものとするには、聊か一考を要せざるべからず、

忌憚なく露骨にいへば、嘘の吐き終りも亦この辭世なり、死後の虚榮心に驅られたもの亦この辭世なり、生前の不平を漏らし怨恨を陳べ愚癡を滾せしもの亦この辭世なり、本來の心にない負け惜しみの結果も瘦我慢の極端も亦この辭世なり、中には捨鉢の文句も亦なきにあらず、

加之も世人は生きて再び還らざる只その死といふものに公平の批評眼を奪はれ同情の涙を注いで、多くの場合その人の心理的研究を逸するがため、この辭世なるも、動もすれば首尾よく一ぱい喰はされ易し、

そもく死に臨みし辭世の一章一句が、生涯を通じて其人に遺憾なく相應し、若くは相應以上に超越し卓絶せるもの、古今幾萬の辭世者中、果して幾人かある、

歌人の辭世に名歌は却つて少く、詩人の辭世に名吟は寧ろ少く、つまり死といふ人間の斷末魔に迫られたる時よりは、虚心平氣その平生の詩歌に佳作秀逸は多し、

大悟徹底せる名僧智識の往生にあらざるかぎり、その死を以て萬世の誇りとせる偉人傑士の最後にあらざるかぎり、いかなる人も、死は必ず多少の煩悶苦惱を帯びて、この煩悶苦惱中より絞り出せるもの、安らかに平かに清く高く大なるべき善なし、只その辭世に敬意

を拂ひ、善意の解釋を施すのみ、もし敬意を拂はず善意の解釋を施さざれば、この辭世なるもの寧ろ其人に對して、なくもがなの感なきにあらず、餘計な業と見るべきもの多し、

されど世人をして自己を記憶せしむるには、最も便利なる方法なり、これを死後の廣告術といふは、あまりに心なき無禮の沙汰なれど、その廣告さへ實は頗る下手に出來たる廣告多し、

死する時、歌も詩も唸らず、黙つて眠るが如くに死するを人間の常態とし、その死は只これ形體の死にして遺せる事業と徳澤の長く亡びず世を益し人を導くもの、これを偉人の死といふ、無言の死も死者によりては獅子吼の力あり、

血迷うて自殺する近來の青年と、乳くり合うて情死する近來の男女に、いづれも必ず黙つ

て死ぬ奴なく、くだらぬ書置のあるを見て、事と人とは大差あれど、ますく辭世なるもの、價値を疑ふ、

避暑 避寒

簞澤なる哉、避暑避寒とは、

そもく我國に於ける盛夏の極は寒暖計の何度にして嚴寒の極また幾度なるか、

いくぢない哉、暑に恐れ寒に恐れて遁げ廻るとは、

簞澤も簞澤の出来るものは可なり、いくぢなしも半病人ならば致方なし、乃至また常に脇目も觸らず努力奮闘するもの、たまくの暑中休暇を利用し嚴寒の幾日を割いて心身休養のためにするは寧ろ益するところ多きも、のろくとして年が年中これといふ業もない人

が無理工面の避暑に出掛け、びちくとして疲勞も病氣もない奴が、貧乏隠しの見え坊に避暑するが如き、沙汰の限りといふべし、

滅却心頭火自涼、これを以て今日普通の場合に用ふべからざるも、家の内にある

もの八九十度の暑氣に堪へられずして、火山脈を遁げ出すに似たるは、あまりに人間その自己を館細工の如く見くびり過ぎたり、人は風土に應じて生る、其國の夏に溶け其國の冬に氷るやうな疎末の製造物ならむや、

現に工場の火夫は目を舞はさず電車の旗振り炎天に卒倒せず、嚴寒に水中の業あり雪を掻き氷を割ツてシャツ一枚に働く職あり、人間の身體これを馴致すれば、我みづから我に驚くほど案外に強きものなり、

この強かるべき身を、わざく弱くして暑を避け寒を避くるが如きは、夏と冬とに不用の

人物たるのみならず、實は春夏秋冬の一年中、この社會に用のない人間なり、ましてや近來は避暑避暑を以て紳士の資格と心得たる馬鹿もあり、その馬鹿を盡さむがため不義理の借金までして出掛ける大白癡あり、蓋し夏の避暑地も冬の避暑も或意味に於て馬鹿と白癡との競争場なり、

いやしくも避暑避暑に騒ぐ奴、まさか其日暮しの裏屋に居にあらず、たとひ内證は火の車にせよ、兎も角も門戸を張れるものとすれば、借屋たりとも門戸の内、小さくとも屋根の下、身分相應に暑を忘れ寒を防ぐの工夫あるべし、随意の讀書、適意の横臥、一坪の庭にも清涼の天地あり、六疊の一室にも自由の暖國あり、その他に心を静め身を安くして休養するの道また乏しからず、工夫なしといふは工夫の出來ざる奴なり、かういふ奴が一時の虚榮心より驅り出されたる避暑避暑に何の效かある、イツそ避暑避暑地の宿屋に奉公して

風呂場の三助たるに如かず、

我親友の一人、曾て避暑に出掛けし事あり、出掛けるには相應に出掛ける用意を整へ、あまり見苦しからぬ筈なりしが、向じ旅館に華族あり富豪ありて、茶代を比較せられ、祝儀を比較せられ、座敷を區別せられ、身分を比較せられ、待遇を異にせられ、その他あらゆる點の不快に堪へずして、憤然と歸り來りし時、我これを笑うて曰く、避暑地は一年中の收入をこの夏に取るところなり、華族富豪の君よりも金持たるは今更の事にあらず、その金持に厚くして君に薄きは當然の理にして、ぶり／＼これを怒るは野暮の骨頂ならずや、もし癩に觸れば男子一片の意氣、後は兎も角その場の張合に紙入の底を叩いて何ぞ華族富豪に持抗せざる、宿屋の主人を驚かして痰呵を切るも亦これ快ならずや、さるを當然の理に怒り眼前の溜飲を下げ得ずして、はふ／＼の體に遷げ歸りしは君の自業自得なり、どうだ

來年また敵討に出直すかと笑へば、この親友ぐうの音も出ず、頭を搔いて以來一切こゝに避暑避寒の念を断てり、

ふりく怒つて歸りし我親友の如きは、天真瀾漫、寧ろ罪なき方にして、今日流行の避暑避寒その多くは實際自己の避暑避寒にあらず、避暑避寒せざる人に對しての避暑避寒なり、何物に踏み付けられて如何なる侮辱を蒙るとも、じつと辛抱して文句も得はず、只その四方に發する手紙のみ、さも愉快らしき贅澤さ加減を見よ、

田舎の百姓家を借りて妻子を伴ひ、山を越え川を渡り海に泳いで心身を養ひ、暑中休暇を最も經濟に最も有益に楽しむものは別なり、たゞ徒らに避暑避寒を誇るもの多く、殆ど世間體に出かける奴の多きは、實に近來一種の社會病といふべし、

避暑避寒の熟語あれば、同時に向暑向寒の熟語あるべき筈なり、されど暑に向ひ寒に向う

て活動し活躍するもの、只これを軍隊の演習に見るのみ、國民これ兵にあらず、事實は兵のみ是れ兵なり、

馬鹿らし記

明治三十六年、久しく住みし舊の家屋を取潰して現在の家を造りし時、前後一年を要せし普請の混雑中、庭の樹木を邪魔物にして諸々に移植せしため、殆ど枯れて庭前一本を止めざるに至る、

普請の終りし後、新に庭を作るや、人に誇るべき泉石の奇は我の及ばざるのみならず、實は好まざるところ、我は只その自然に似たる樹木鬱蒼を目的とし、これを求むる個條に曰く願はくは百年上、尠くも七八十年の樹木にあらざれば購はず、また冬季に落葉する

ものは斷じて取らず、花は嫌なり、花を見たくば花の名所に行くべしと、第一の目に付きしは、同じ根岸の奥にありし百姓家の椎の木なり、高さ四丈に餘り幹これに叶ふ、賣らずといふを無理に買ひ取りしが、入らざる謀反氣を起して一番これを本職の手にかけず、運動かたぐ、天晴れ素人の手際に植を替へて見むと、書生三人を伴ひ、四人がゝりに掘りかけし時、近處の植木屋に口の悪い奴め冷笑うて云ふ、先生、それは薪にでもして御持ちなさるんですかと、これ馬鹿にされたる馬鹿らし記の第一、けしからん事を吐す、今に見て驚愕するな、此まゝ生きた植木で持つて行くぞと、四人の力を協して掘ること終日、深さ等身に達すれども平地よりも盛り上りし土の三四尺ありしため、蟠れる盤根いまだ半を現はさず、實は頗る閉口せしが、植木屋の一言いかにも癪に觸り、その翌日また四人協力の流汗淋漓、やう／＼根を掘り終るや否、うれしまぎれの一

時に力を合して押せし一刹那、めり／＼と音するに驚き、おもはず仰ぎ見れば百姓家の軒先一間あまり、この破損料を加へて樹木は三倍以上の價格となれり、これ馬鹿らし記の第

二、

傾いて軒に支へられし大木、これを起すに四人の力は、もはや寸分の效なくして、如何ともする能はず、加之も百姓屋の隣家は例の植木屋なり、をり／＼裏口より妙な面を出して差覗き、へ／＼と笑ふ、ます／＼豈それ癪に觸らざらむや、これ馬鹿らし記の第三、癪に觸れど木は動かさず、其まゝ捨て／＼も置かれず、今更ら植木屋に降参するは残念なり、我こゝに窮して通ぜる一策は他なし、いはゆる薦のもの、同じ根岸の仕事師十人を呼び來りて曰く、火事場よりも安心ならずや家庫を引くよりも手輕ならずや、普請の足場を掛け

と、聊か勝手違ひに躊躇せし仕事師を罵まし、ジャツキを以て根を繰り上げ、四方に綱を張りて道にコロを構へ、酒の勢ひに乗じて木遣を唄はせ、我また三人の書生と共に大肌ぬぎの勇を鼓し、笑ふものは笑ふべし、どうせ半狂者とせしものあるを承知の上、竟に我家へ運び込み、無論その運び込みし時に塀を切り開きしこと二間半、途中人家の瓦を落して償ひしところ三軒、警察へ届けずして往來を塞ぎし叱られ損もあり、十人の仕事師、めでたいめでたいと騒ぎし騒ぎ料もありて、前の三倍以上は總計二十倍以上となれり、これも馬鹿らし記の第四、

されど不思議に枯れず衰へずして、亭々と今日の我家を凌げるもの、この椎の木なり、かうなれば聊か以て馬鹿らし記の一を減すべきか、へ〜と笑ひし例の植木屋、我門前を通行する毎に仰いで、薪にもならず生きて繁茂せるを、どういふ面で見ると思へば、癩癩

の蟲また聊か治まれり、

その次の馬鹿騒ぎは向島の洲崎より演じ始む、同じ椎の木にて幹の太さ一丈五尺餘、根元は手を繋いで三人の包圍に餘れり、現在の持主いふ、これほどの大木は迎も無効なり、たとひ首尾よく運び得ても付く筈なしと、我これを耳にせず、強ひて購ひしが、前に懲りて一切を本職の植木屋に任せ、牛車を聯ねて黎明これを曳き出させしが、見るもの驚いて、

どこの馬鹿が買うたと、これ馬鹿にされたる馬鹿らし記の第五、
洲崎の奥より向島の土堤に上り、向島より吾妻橋を越え、淺草より阪本通りに出でて根岸に横はれば、俄に道路の狭きため、餘儀なく四方の枝を伐殺し、心外ながら殆ど幹のみを持ち込みて、なほ諸々の瓦斯燈を飛ばし左右の屋根瓦を落し、いち〜これを賠償しつゝ我家に入りしは夜の八時半、加之も今度は塀のみにあらず、方向位置の都合上に門まで潰

して徹夜に植ゑ付けしが、果して枯れたり、朝夕その枯れたる大木を眺めて、ぼかんと口を開いたところ、正に是れ馬鹿らし記の第六、されど實は幹根いまだ全く死せず、翌年、新に根元より數多の子を産み、今その子は次第に成長繁茂して殆ど親の幹を包めり、始めて我家を訪ふもの、玄關の左側この木を見て、この木ありしがため家を作りしかと問ふ、否、わざ／＼植ゑしものと聞くや否、いづれも目を剝いて、こんな馬鹿大きい椎を能く持つて來たねといふ、やはり馬鹿らし記の第七、その後さらに種々の大木十七本を植ゑしが、悉く多少の馬鹿らしきを附隨して、實際に枯れしは前後七本、さらに泉石の奇なしと雖も、以上の馬鹿らし記を重ねて、兎も角も鬱蒼たる我目的は達せり、いふ勿れ、その馬鹿らし記は汝の馬鹿なるが故にして、さほど他人は馬鹿を重ねずとも庭

を作り得べしと、この論鋒で來る奴、有り餘る金持の庭いぢりか、乃至また人間には無用の有用といふ面白味を解せざる浮世しらすの乾燥漢なり、わづか百坪に缺けたる我庭前に我自由なる樹木を植うるさへ、いち／＼これほどの馬鹿らし記を重ねざれば、こゝに始めて四時青々たる能はず、ましてや際限なく廣き社會に對する人生一個の事業、すらくと先見通りの思ふまゝに行かざる筈にして、加之も猶更ら競争激烈なる今日の時勢に向うては、失敗あり蹉躓あり滑稽あり、よほどの馬鹿々々しき無用の苦勞を重ねて後、漸く始めて馬鹿々々しからざる有用の域に達すべし、自己より先に出來たる世の中を後から生れた人間一疋、これを心のまゝに咬へて振り廻さむとは、あまりに蟲の宜すぎた奴なり、それが叶へば誰が好んで苦勞すべきや、

門外より仰げば殆ど森林中の間隙に廂を見るのみ、樓欄に倚りて見渡せば滿目青々として市中にあるの感なし、冬なほ鬱蒼たる此風物、あれだけの馬鹿さ加減より得たりとすれば人は知らず、我には寧ろ馬鹿らし記の大に馬鹿らしからざるを知る、

あやふや人形

昔、あやふや人形あり、今あやふや人間あり、曾て我の用なき時、人形の事を調べしに、古代の人形は草を束ねて作りしがため、文字上これを菊霊と書し、ありのまゝに讀んで、くさびとがたといふ、その後土を以て作りしを土偶人と稱し、木を以て作りしを木偶人と稱し、いづれも始めは人間の身代りとして、殉死祈禱その他また典禮儀式に用ひられ、いはゆる金人銀人の例ありしが、後世は全くの

娛樂となり、玩具となりしより、その名稱は頗る俗化せしも、その製造技術は次第に進めり、

第一に傀儡、からくり人形あり、芥子人形あり、三月の雛人形あり、五月の武者人形あり、輕業人形あり、金平人形あり、樽人形あり、筆人形あり、與次郎人形あり、市松人形あり、飛人形あり、すまう人形あり、土地の名産としても京人形あり、奈良人形あり、伏見人形あり、有馬人形あり、博多人形あり、最も進歩せるものに生人形あり、その他あらゆる人形の多き中に、元祿年間、あやふや人形といへるものあり、

あやふや人形、何ぞ其名の突飛にして面白きや、あやふや人形は、氣まゝ頭巾を著たる元祿風の佛を寫して、そのころ狂歌の下の句に「この人形の顔のあやふや」といへる如く、美人と悪女の兩面を有し、これを自由自在に出没

放言録—あやふや人形

變化さすべき仕掛に出来たり、鬼が出るか佛が出るかと一般、美人が出るか醜女が出るかその場の愛敬に人を笑はせ、また一は女縁の吉凶判断に用ひしといふ、どんな女が乃公に當るか、あやふや、危ぶむ意味にして、華奢風流の女三昧、いかにも、時代の人情を穿てり、

あやふや人形、これを現在に求めむとすれば、なかく手に入らずして、殆ど得難きものなれど、あやふや人間は今日の社會いづれの階級にも到るところ満員また満員、押すな押すなと目白押しに居並べり、

もしこれを人形とすれば、百個づゝ一函の正札付として、幾何の價ありや、

子 寶

兼好法師は徒然艸の一節中、多くて見苦しからぬものを文車の文と塵塚の塵とせるに對し家に子孫の多きを見苦しきものゝ一に數へしが、兼好は殆ど世捨人なり、或は世の捨てられ人なりしやも知るべからず、

これに反し、家庭に子なきは乾燥無味にして夫婦下宿屋にあるが如しといへるは、寧ろ今日の社會に適切なる實際の明文なり、

世間の諺、これを俗に子寶といふ、

我友人中、あまり慾張り過ぎて、この子寶を十六人も所有せるものあり、加之も負けず嫌ひの氣焔萬丈、常に威張り散らして曰く、一人一萬圓とすれば十六萬圓、もし二萬圓づゝとすれば三十二萬圓、中には一人で數十萬圓を稼ぎ出す奴もあるべし、さつと百萬圓は人手を借らず拵へたる我輩の現財産なり、捨て置いても盜賊に取らるゝ氣遣なしと、

然るに近來二十四歳となりし長男、聊か不出來にして放蕩を覺え、或藝妓と妙な戀に落ちて頗る阿父を困らせ、殆ど手に餘りしとの噂を聞きし我、その友人を訪うて曰く、どうだい、百萬圓の内、そろ／＼缺け始めたぢやアないかと、

されど友人の強情なる、なほ屈せずへらず、口を叩いて曰く、彼奴だけは仕方がない、ありやア所得税と相續税に拂つた心算なりと、頻りに後の子實を大切にせしが、幸ひ次男以下その兄に似ずして、學校の成績いづれも優等、身體また悉く健全、そこで阿父の鼻息ますます荒し、この分ぢやアまづ八九十萬圓だけ確實なりと、

立腹

立腹は憤怒の俗語にして、文字通りに腹の立つ事をいふ、そも／＼立の存を冠せるもの、

立志、立法、立春、立秋、立花、立禪、國家として立憲政治の類、いづれも祝福すべき慶事に屬すれど、腹ばかりは立て、益なく、また人に忌まれ人に嫌はる、

されど人間に腹の立たざるものなく、腹も立て工合によりては損のみにあらず、随分この立腹を巧みに應用して或意味に成功せるものあり、外面に腹を立てず心の底に奥深く腹を立て、畜生、今に見るといふもの、立腹これ奮起の基なり、

宗教家これを第一の禁物とせるは暫く措き、我の知れる人に最も面白き立腹談あり、その人は關西の財界に有力者たる一面また花柳界に通人の名を稱せられ、洒落風流いかなる場合も未だ會て腹を立てし事なかりしが、この紳士の生れて始めて腹を立てしは、或時、筑前の博多に滞在中、徒然のあまり旅窓の一夕、ふと戯れに手を出せし一人の藝妓あり、この藝妓その人の容貌よりも實は其人の名と地位に惚れ込み、頻りに妾たらむ事を

乞うて朝夕その傍を離れず、うるさく取付かれ、やいの／＼を極められし苦しまぎれに女難除けの一策を案じ、大阪より随ひ來れる半幫間の男に命じて云ふ、あの女を別府の温泉へ連れ出して口説き落とし、いよく出來ましたと我に一書を郵送せば、諸入費の外、汝に

五十圓の口説き料を與ふべしと、

女を口説いて五十圓の褒美に半幫間の男、これが南瓜の當り年と座敷中を躍り廻り、旦那は後よりといふ口車に乗せて首尾よく別府の温泉へ連れ出せしが、別府へ達せし翌日の早朝、博多にありし紳士の枕頭へ一通の電報、おもはず開き見れば、

デキマシタ

流石の紳士、あつと呆れて驚けり、固より承知の上ながら、いかに早くとも必ず三日や四日は掛るべく、まさか別府へ著いた其晩、すぐに出來るとは夢にも思はざりしに、これは

案内あまりに早過ぎたと、この時ばかりは少々腹が立ちしといふ、

加之も豫期せしところ、細々と手紙に認めて、口説き鹽梅の骨の折れた工合を待ち受けしに、直ちに簡單なる電報の「デキマシタ」は頗る面白からず、これで五十圓の褒美を出すかと思へば、あまり張合が無さ過ぎて、いやな女も今更ら惜しい心地がしたとは、いかに露骨に人情の弱點を語れり、

腹の立つといふ奴は世間に多く、我また常に絶えず出喰せど、十中の八九聞くも面倒なる理窟詰の不平と愚癡ばかりにして、これほど面白く呵しく人情の機微を穿てる腹の立ちやうを聞きし事なし、

をり／＼大阪に遊びて、この紳士に會する時、その眞面目なる顔と對照して思はず吹き出せば、や、例の事ですかと紳士また吹き出せり、

失 敗

罪なくして穉氣を帯びたる或人の失敗談中、
 曾て青年時代の頃、親友二人と相伴ひ、十二月の末、學校の休暇を幸ひ、伊勢參宮を企て
 て山田の旅館に投ぜし時、我々三人を貧書生と見たる宿屋根性より最も疎末なる四疊半の
 一室に押し込めり、加之も其日は外に客なく、いづれの座敷も殆ど空席たるを知るや否、
 徒らに意氣軒昂の當時、いかでか承知すべき、大聲疾呼、下女を吹き飛ばし番頭を吐鳴り
 散らし、竟に主人を呼び出して喧嘩腰に其無禮を責め其冷遇を怒り、當家第一の大座敷に
 通せと威張り出せし結果、主人また意地になりて、宜しう御坐いますと案内せしは二階の
 大廣間、幾組なりとも春の田舎道者を詣詰にする百疊敷、左右は表と裏に面して、ところ

く破れし障子越の寒風凜冽、後の高窓は邪慳に開け放たれ、たゞ一方に壁あるのみ、手
 を叩けど急に來らず、叫べど遠くして聞えず、わざと火の氣の薄き瀬戸焼の火鉢一個と板
 の如き固く冷たき座蒲團三枚、この座蒲團を敷き其火鉢に嚙り付いた三人、實は齒の根も
 合はず顔ひ上りしが、今更ら片隅に寄るも残念なりと、百疊の中央に瘦我慢を通して、龜
 の手の如く手足を縮めながら夢も結ばず一夜を明せしが、翌朝、三人ともに悉く風を引い
 て鼻垂となれり、

さらに二度目の失敗は、或年の秋の末、また四人の親友と田舎旅行をせし時、農家の背門
 に柿の木ありて、いはゆる百目柿の熟せるを見るや、何事にも無鐵砲を快とせる當時の勢
 ひ、一人前一圓づゝ出し合うて樹上の柿を悉く五圓に買ひ取り、いづれも猿の如く攀ぢな
 がら思ふ存分に食ひしが、逆も食ひ盡せざるため、わざとくその地の宿屋に入りて泊りが

放言録—失敗

けに翌日また出かけ、再び大に胃袋を擴げて我身しらすに競争せし結果、五人もろとも其夜より俄の腹痛に下痢を起し、便所の前後を争ひつゝ、田舎醫者を呼んで凹垂れしこと一日、中には一週間以上も寐込みし奴あり、甚だしきは當時この柿が祟りて三四年も胃腸病に苦しみしものあり、

以上この二つの失敗談を手取る如く、さも面白げに、さも得意げに、膝を乗り出しつゝ我に語りしが、何ぞ圖らむ、この失敗談の本人は我にして、或人は五人の内他より聞きし請賣なり、その請賣を本家本元の我に向うて語る、重ね重ねの失敗談こゝに至りて更に妙といふべし、
妙は妙なれども或人これを我以外に語れば或人の事實談なり、今日の世人、その成功談のみと思ひの外、その失敗談また眉に蹙して聞かざるべからず、

河 豚

河豚を好むもの、およそ魚類中に天下また河豚ほど美味なものなしといふ、

我の曾て屢々臺灣に往來せる時、往來の前後、必ず三四日を馬關に逗留せり、馬關は河豚の名物名所を以て四方に聞ゆ、この馬關に來りて河豚を食はざる、なほ京都にありて鯉の味を知らざるが如しと、絶えず河豚仲間の友人より野暮扱ひを受けしが、我は竟に河豚を食はず、いはゆる食はず嫌ひを以て押し通せり、

聞く河豚には十六種ありと、その中に最も名高く人の嗜好に上るもの、真河豚、しやうさい、あかめ河豚、虎河豚、ごま河豚の類にして、加之も河豚の有毒なるは古今の立證その實例に尠からず、俗に河豚を鐵砲と呼ぶ所以、中れば必ず死すべき意味なれど、河豚黨こ

れを笑うて云ふ、河豚は料理の手際次第で安心なりと、馬關邊この河豚は昔の江戸に於ける初鯨と等しく、殆ど競ひ寧ろ誇りて食ふ、
 石林詩話に曰く、「河豚方出時、一尾直千錢、然不多得、非富人、大賈、豫以金、瞰漁人、未易致」いよく以て河豚黨の氣焰を吐くに足る、
 されどまた、河豚を食はざる我黨より見れば、梅堯臣の宛陵集に於ける詩中、「入喉爲莫耶」の恐ろしき一句あり、河豚を食ふは名劍を呑むが如しといふ、
 いづれにせよ、河豚に毒あり、調理の手際次第で安心なりとは、既に河豚黨その有毒を自白せるものにして、一朝もし調理を過れば忽ち中毒すべし、いかに美味たりとも人間の生命を賭けて食ふほどのものならむや、
 我の馬關にありし時、この河豚に付いて頗る面白き實際の滑稽談あり、たま〜東京より

來りし相撲の興行中にして、由來力士は多く河豚を好む、其うちの一人これに中毒して、大兵肥滿の五體を手鞠の如く轉げ廻りしが、河豚の中毒に人糞を呑めば忽ち全癒するの俗説あり、傍の三四尺、聲を揃へて、どうだ糞を食ふかといへば、中毒の力士、轉輾しながら苦しまざれに答へて曰く、上ツ側の綺麗なところを少々ばかり掬ツて來てくれ、上ツ側も下ツ側も糞に綺麗なところあるべきや、蓋し滑稽の名句、不用意なる自然の一利那に出づ、

鯨 鯨

その味の河豚に次ぐものを鯨鯨といへど、河豚排斥の鯨鯨黨は、寧ろ河豚よりも美味なりといふ、

いづれにせよ、鮫鯨も河豚と等しく、これを好むものは無上の珍味とす、たゞ鮫鯨は河豚よりも廣く多く世間に安心して用ひらる、我また河豚は食はされど、鮫鯨に多少の趣味を有せり、

横井也有の鶉衣に、鮫鯨とは仔細めきたる名を持ちながら吊し切とは情なやと洒落れたり、いかにも鮫鯨のみは魚類にして俎の上に乗らず、肴屋の軒端に吊し切の最後を遂ぐ、

されど魚類中に鮫鯨ほど悦けたるものなし、

この鮫鯨先生、その容貌風采の奇なるのみならず、その海中に於ける生活状態また他の魚族と異なりて一種特別の技倆を有し、ある一定の深き海の底に死物の如く身を沈め、急かす慌てず狼狽へず、悠々寛々として身を勞せず居ながら、自由自在に食を求む、蓋し鮫鯨先生の都合よく生れたる、その鼻頭に細く立てる軟骨を有し、軟骨の尖端にべらくとせ

し柔かき皮ありて、殆ど旗竿に似たり、先生の先生たる所以、その身を少しも動かさず、只この旗ばかりを潮に動かし浪に動かせば、飢ゑたる他の小魚族これを餌と見違へて、うかく近寄るや否、じつと待ち受けた先生、その下より例の大口を開き、ばくりと一息に呑み込んで、さらに知らぬ顔の半兵衛を極め込む工合、また直ぐ後のお變りをしてやる横著さ加減、その容貌の悦けたる不恰好の割合には案外の鋭き點ありて、實に油斷のならぬ先生なり、

絶えず怒濤激浪に揉まれて四方に餌を求むる苦心慘愴の魚族中、この鮫鯨先生、かういふ欺し討の藝を以て暢氣に好きなものを食ふがため、人界に捕はれて吊し切の刑に處せらるされど我々の人間社會、また生活難に追はるゝ今日、この鮫鯨に類せる横著先生なきや、否、寧ろ多し、加之も殺して鮫鯨ほどの味ある奴なし、

鯉

鯉は加豆乎、かたうをにして、堅き魚といふ意味を略せるもの、古は堅魚と書してかつを
 と訓み、後これを一にして鯉の俗存を作れり、松魚とせしは漢字より來る、
 また古この鯉は生魚のまゝに食はず、悉く乾し固めて山間僻地に用ふ、なほ今日に於ける
 鯉節の如し、かたうをの意義ますす、證すべし、
 昔この鯉を生魚として食せしは、殆ど飢餓に迫れる海濱の窮民のみにして、當時の一書に
 いふ、鎌倉海有魚名鯉、土人不甚珍之、(中)此魚不上鼎俎、僕隸下人不肯喫其肉、
 人に使はるゝ下男下女も肩を擧めて御免を蒙りしほどのものなり、後世この鯉の刺身が江
 戸ツ子の腸を扶りて天下一品の美味たらむとは、

天明年間、初鯉一尾の價は二兩二分に上る、實に今日の二三十圓なり、加之も秋の古背と
 なれば初鯉に三四倍の肥大なるもの錢二百文に下る、嗚アを離縁しても初鯉を食はざれば
 男にあらすと、満心の穉氣を帯びたる江戸ツ兒の面目、見るが如し、
 いかにか金があつても吝な野郎の生涯その口に出來ざるものとして、かの川柳に、初がつを
 伊勢屋の門を素通りし、初鯉を々と息を切らして呼び歩く聲も質屋の門口だけは決して御
 用のないものとせり、目に青葉山ほととぎす初鯉、この句は或意味に於て殆ど江戸の生命
 を語る權威あり、
 蓋し江戸ツ兒は、鯉の味ひよりも鯉の價を食へり、實は鯉といへる魚を一種の競争物とし
 て、世間この競争物に向ひ、時代の熱狂ますます前後を顧みるの違なく、只その虚樂心を
 満たせるものといふべし、

されど鯉は元來の不味なるものにあらず、古この鯉を喜ばざりしは、魚族の多きと人口の薄き關係上、さらに漁業の發達せざると運搬の容易ならざる關係上、結局は海濱と都市との交通不便なりしたため、生魚鼎俎に上らず、たゞ乾し固めたるものを山間僻地の用に供せしのみ、今日の初鯉が江戸時代の如くに貴まれざる、また以上の反比例に依る、鯉は煮るよりも焼くよりも、いはゆる皮付の刺身を第一とし、また土佐流のたゞき更に最も可なり、

鯉の分析表を見れば、

蛋白質 二五、〇六
水分 七二、七三

脂肪 一、二二

灰分 一、〇〇

また以て滋養分の多きを知るべし、たゞ腐敗し易きためブトマイネの毒を生ずる恐れあり

世間一般これを鯉に酔うたといふ、鯉に酔うては江戸ツ子の面汚しにして「鎌倉は生きて出でけむ初鯉」といへる芭蕉の句に對し申譯なき次第ならずや、

私の鯉に於ける、實は刺身よりも、たゞきよりも、乃至また生節の種々なる調理よりも、古來そのまゝに製造し來れる鯉節を以て最も貴きものとす、

背節、腹節、龜節、いづれにせよ、わづかに一種の魚類を以て、その死骸のミイラとなれるが如きに拘はらず、これほど天下に廣く普く調法がられ有難がるゝもの、他にあらたや、

我は常に一本の鯉節を以て、現今の政黨演說百番よりも、寧ろ間違ひなく實際に其效果の偉大なるを稱せり、

鯉節また世間日常に缺くべからざるのみならず、我國の風習慣例めでたき祝ひの時には必

す缺くべからざる贈り物として用ひられ、加之も神社宮殿の屋上に太古の遺風を傳へし鯨魚木ありの魚族の王といへど鯛木なく、いかに大なりとも鯨木なし、鯨節の名産地としては、土佐、薩摩、伊豆、紀伊、安房、盤城、下總の銚子、陸前の仙臺陸中の南部産を數ふ、日露戦争の後、歐洲列國いづれも日本兵の勇武絶倫に舌を巻き、殆ど菜食せる五尺の短身いかにして連戦連勝せしかと頻りに其原因を研究せし時、一外人、眞面目に語りて曰く、祖先以來、日本人は必ず食物を煮るに鯨節といへるスープを用ふるがため滋養充實體力頑健なりと、滑稽は滑稽なれど、滑稽中、この鯨節また我國威の發展と共に世界的の氣焰萬丈を吐けりと云ふべし、

反 故

今日は反故となりて人の顧みざる中にも、いはゆる温故知新の一端に供すべきものなきにあらす、昔の嘘競べと題せる番附を見るに、勸進元は神道の高天原と佛説の地獄極樂にして、年寄は商人の現金懸値なしと醫者の仁術なり、東西の大關以下、おもしろきものあり、

- あつても　もう慾張らぬといふ金満家
- 足らず　迎ひに来ら早く死にたいといふ年寄
- せぬに　一生獨りで居たいといふ娘
- あたに　再縁はせぬといふ若後家
- 他人の　七生まで勘當だといふ親

放言録一反 故

○ 來ない また出直して來るといふ客
 ○ 損をし 儲け話ばかりする相場師
 ○ めりを出 勝つても負けたといふ賭博師
 ○ さぬ算段 勝つても負けたといふ競賣屋
 ○ 品がわ 問屋おろしなみといふ競賣屋
 ○ はかり出 はかり込んだといふ米屋
 ○ しながら もうそこだといふ田舎道
 ○ かな 四苦八苦で のんきなものだといふ藝人
 ○ 居ながら 樂でないよといふ妾
 ○ なしなから 悉く擧げて數ふべからざるも、世間の番附に乗るべき昔の嘘の程度は、まづ此くらゐの
 簡單幼稚なるものにして、これを虚偽術に進歩せる今日の人心に比すれば、殆ど取るに足

らず、寧ろ嘘の資格なく嘘の範圍に入らざるべし、もし今日の社會に於ける内外表裏の嘘
 八百を列擧して、嘘競への番附を作れば、學者、政治家、實業家、美術家の類に至るまで
 その嘘の巧にして悪辣なる、その罪の深くして大なる、いかに恐ろしく毒々しかるべきぞ
 嘘競への番附と共に、また反故中より現はれたる馬鹿の番附を見れば、さらに妙なり、

- 死んでぞ 情死をする無分別もの
- 怪我を 火事場へ飛び出す彌次馬
- いらす 身のほど知らぬ大喰ひ
- この不孝 親の面へ泥を塗る忤
- の頭取 大金で女郎を身請する客
- つよがツて 人の喧嘩を買ツて出る奴

- ためにな 子を甘やかす親馬鹿
- 外に仕様の からだを切賣する娘
- 尻ばいてなし子を孕む下女
- ばか 高い金で安い梅毒を買ふ奴
- 勘定にぬすみをするための火附
- 氣をつこはくで河豚を食ふ人
- いやなら犬も食はぬ夫婦喧嘩
- わが身亭主の下足を觸れ歩く鼻
- ひる日 喉アを自慢する亭主
- 鼻持が間男をする女房の智慧

- ひと困むやみに強がる力自慢
- みつと女湯を覗く嫌な野郎
- 笑はれ 大言を吐くへボ先生
- 年よッ 若い時二度ない不料簡
- て困る 持參金を鼻にかける嫁
- ひきず 亭主を持ッて樂をしたいといふ女
- りめ 亭主を持ッて樂をしたといふ女
- あとで 借金して奢る見えばう
- うする 借金して奢る見えばう
- めんぼ むすこに意見をくふ阿爺
- 見居 をどりを習ふ大男
- れぬ をどりを習ふ大男
- なんにも 嘘を上手に吐く人

放言録一反 故

番附の全面これに十倍以上の數あれど、昔の馬鹿また今日の馬鹿に及ばず、この馬鹿が加減も大に異なりて、現在の社會に於ける馬鹿は以上の如き露骨の馬鹿でなく、つまり馬鹿臺に伶俐鍍金せるもの、ちよいと見れば馬鹿に見えざるところ猶更ら入念の馬鹿多し、加之も馬鹿に受賣の理窟が附いて廻るだけ、いよく以て厄介千萬なる馬鹿多し、ついでに馬鹿といふもの屁理窟の多きを證するため、こゝに馬鹿が人の言葉尻を捉へて鬼の首でも取つた如く、その重複を咎め、さも手柄顔に威張るものを掲ぐべし、由來この馬鹿は斯の如き無用の穿鑿に耽りて、ない智慧を絞るものなり、

- 御還御
- 草紙
- 五色の色
- 御後御
- 大きな大佛
- 利解を解く
- 半紙の紙
- 家の家傳

○時代時節
○人が無人
○寶珠の珠
○安々と安産
○人の人相
○賽錢錢
○目の見えぬ盲目
○美しい美人
○大事の事
○夜夜中
○蓮華の華
○短い短刀
○手水水
○乾物物
○好物物
○持病持
○全く全快
○怪談談
○泉水の水
○團圓子
○人は上人
○買物を買ひに行く
○耳が聾
○夫婦二人連

殆ど際限なしと雖も、かゝる無用の事に力癪を入れて何の效やある、萬事この流を以て世に處し人と争ふもの、これ即ち馬鹿の正體なり、

大切の思案中、職務の繁忙中、かういふ奴に押し込まれて、どうです、一議論と來られては、遁げ出す外なし、

天真爛漫

鐵眼和尚の浪華にありし時、夜深くして十八九の美人その門を叩く、きけば遠くより來り道に迷うて宿するに家なしと、和尚これを憐れみ、禪家の女人禁制を顧みず、寺に入れ方丈に導き自己の隣室に臥せしむ、徒弟數人、その容色の絶世に驚き且つ怪しみ、互に聲を潜めて曰く、師もまた人間なりと、竊に襖の間隙より差覗けば、鐵眼和尚、赤裸々に大胡坐を搔いて線香と艾を持ち出し、頻りに勃起せる男根を押へて灸せり、直指人心、見性成佛、豈それ結迦趺坐にあらむや、開單展鉢阿屎放尿また拈華微笑に通じ

て心身脱落の禪なり、正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の講釋に没頭せむよりは、美人を見て男根に灸せし鐵眼和尚の天真爛漫を學ぶに如かず、

我は近來の流行せる野狐禪を憎む、野狐禪なほ忍ぶべし、唯佛與佛乃能窮盡を弄んで、いやに澄まし込み妙に氣取る奴を最も惡む、

寄生蟲

寄生蟲は讀んで字の如し、

その種類は頗る多くして、いち／＼これを擧ぐるの煩に堪へず、たゞ比較的、自己より進歩せる生活體に生を寄せて滋養物を攝取するもの、乃至また植物性に寄生せるものをいふ、つまり獨立獨行の自個存在を營み得ざるため、他の影に潜み他の力を藉り他の物を偷み食

うて自己の生を保つもの、働かずに巧い事せむとするを蟲のいゝ奴とは、こゝに始まる、寄生蟲さらに二大別して、外部に寄生するものと、内部に寄生するものとあり、この寄生の状態また四種あり、第一は自己みづから他に自由自在の生活しながら、をりをり必要に迫りて寄生するもの、第二は幼穉の時に寄生しながら、老熟して他に去りつゝ自由生活をするもの、第三はこれに反し幼穉の時は他に生存しながら老衰して寄生するもの、第四は常に一定の宿を定めずして勝手次第の處々に轉々するもの、以上の四種とす、寄生蟲の寄生状態、何ぞ人間の怠惰漢と横著漢と意氣地なしと狡い奴に似たるの甚だしきや、四種の状態さらに研究すれば、ますます趣味深くして、いよく人間に似たる點多し、十二指腸蟲と蠅蟲を以て人體内部の寄生蟲とするが如き、寧ろ他の寄生蟲より文句を持ち込まるべし、虱と南京虫とを以て人間外部の寄生蟲とすれば、共に不平を鳴らして、生意

氣な事をいふなと怒るべし、

懸想文

往昔、懸想文賣といへるものあり、烏帽子に赤き布衣を著け袴を穿ち覆面して、正月元旦より十五日までの間、梅が枝に數多の封じ文を結びながら、言葉優しく都の町々を賣り歩き、價は買ふ人の心に任せたり、その文を披き見れば、

寢よげに見ゆる若草の、はつ君を見そめまゐらせ候、青柳の糸なつかしみ、夢うつゝ戀ひわびてのみ、住の江の岸に生ふてふ忘艸もゆかしく侍り、淺香の沼の淺からぬ心のほどを春風の便りにつけて知らせまゐらせたまさ、遠里小野のおのれのみ想ひ絶えなむよりはと、つかみじかき筆とりて示しまゐらせ候、たとへ君、心しあらば、子の口して

曳手にまかせ、野邊の小松に嬉しき返り事、きこえ給はむことを願ぎ侍り候、かしこ、

澤水の心も深きかたくなの 男より

初春のけふ春風にとけぬ氷の

をしき様まゐる

また別に左の如きもあり、

かけてはいかゞ常陸の海のいたづらごとを、はつ春の筆のはじめに、かくとも聞えま
ゐらす、けさ明け初むる浅みどりの空に、山の端の雪むらごの御きながし、姿こそし
どけなく世にめづらかなれ、細腰の柳に白き御ものごしは、紐とくくとはせ給ふと
も、萌え出づる草のはづかにも、かいま見たてまつらばやと、東風のこちよらせ給は
れなむ、なほ天津風の難なからぬをねがひ上げまゐらせ候、めでたくかしこ、

二様いづれも名文ならざれど、世は静なる初春に懸想文を賣り歩く 閑雅時代の天下太平
を見るべく、これを買うて其まゝ思ふ人に送りし當時の優美なる風習を見るべし、

この懸想文に付いて我は思ふ、青年男女の間に艶書頻々たる今日、これを大に復興して現
代的の文章とし、あなたは僕と同棲する意志ありませんか、僕は満身を愛を以て生命を捧
げます、もし貴嬢に捨てられたら失戀の自殺しますぞといふが如き名文名句を聯ねて、こ
れを舶來紙の活版摺とし、コスメチックや香水の類を景品に添へ、カチューンヤ可愛いや
の樂隊入を以て賣り出せば、いかなる輪轉機を以てするも、到底その賣行の飛ぶが如きに
及ばざるべしと、

いたるところ血眼に利を追ひ廻る今日、かくの如く簡易輕便にして加之も實際これほど利
益の多き商賣あるに、何ぞ氣付かざるや、

情 死

近來の新聞紙上、頗る情死多し、
 男女の情死は世界に於て殆ど我國の專有物たるが如し、つまらないものを專有物とせる哉、
 經世家、教育家、忽にすべからず、
 徳川幕府の制條、これを相對死と稱し、當時の世間これを心中といふ、
 心中の語、男女とも互に心の中を打ち明けて見せ合ふ意味にして、いはゆる心中立なり、
 心中立の輕きものは、髮切、指切、入墨の類より最後の極、死しての心中に至る、
 古事記に允恭天皇の時、輕太子その妹に通じ、露はれて伊豫に流さる、妹これを慕ひ行き
 共に自殺せり、そも我國に於ける情死の元祖といふべきか、國學者また斷じて曰く、

今俗に心中といふ事の始めとやいはまし、
 徳川氏の享保年間、男女申し合せ相果て候ものといへる條目中、不義にて相對死いたし候
 もの死骸取捨て爲弔間敷候、但し一方存命に候はゞ下手人、雙方存命に候はゞ三日さら
 し非人の手下とあり、
 即ち情死の死骸は其まゝ取捨て、葬式を禁じ、男女いづれか一方の生き残りしものは人殺
 しの下手人となり、情死の死損ひは江戸繁華の中心たる日本橋の橋詰に荒薦を敷いて坐せ
 しめ、三日間その生面を往來に曝して後、これを非人の手に下して乞食仲間に落せり、徳
 川氏の情死に對する制裁また峻嚴なりといふべし、されど實際この堪へ難き生恥を曝され
 したため、今日の如く情死未遂の病院に運び込まるゝもの尠く、寧ろ思ひ切ツて死を遂ぐる
 もの多し、

江戸時代の最も世に唄はれし心中沙汰は、藤枝外記といへる五千石の大旗下、新吉原の大
 びし屋に通ひ、其ころ名高き綾衣といへる遊女と情死せしより「君と寝やるか五千石取ろ
 か、何の五千石、君と寝よ」この唄を三味線に合して、いたるところ盛に行はれたり、加
 之も現在この唄の盛に行はれし後、心中沙汰また實際に多かりしといふ、
 情死は情死するものに男女の相思以外、また世に唄はれたき一種の虚栄心ありて、殆ど傳
 染病的の流行性を帯びたるは、なほ今日の情死者中、新聞に出されて寫眞でも入れてほし
 い奴の多きと同じ、
 また情死は繁華と伴ふ、江戸に對して心中沙汰の多かりしは浪華なり、浪華に名高きもの
 お初徳兵衛、小春治兵衛、おさん茂兵衛、お千代半兵衛の類、擧げて數ふべからず、加之
 も近松門左衛門といへる古今獨歩の作者ありて、これを文飾し、これを詩化し、淨瑠璃演

劇その他の戯曲に供せしため、うき世の思ふまゝならぬ悲しさに打沈める男女、いとど猶
 更ら情に泣き事に迫りて、夢うつゝの如く誘ひ行かるゝもの、江戸の心中沙汰よりは頗る
 多かりしといふ、
 詩的文學の力あまりて情死鼓吹の結果を産むが如きは、文學そのものゝ權威よりも社會の
 ため更に大に考へざるべからず、されど薄弱なる今日の文學、その點だけは寧ろ安心なり、
 却つて事實を詳記せる新聞紙に恐るべき情死傳播の力あり、
 蓋し情死の我國に多かりしは、佛教の影響その第一にありて、はかなき現世を悲觀すると
 共に樂しき來世を願ひ、一蓮托生の信念に駆られ夫婦は二世の謬に迷ひ、これに世間の義
 理柵と情緒纏綿の離れ難きとを加へて死せるものといふべし、
 今日的情死は未來夫婦の舊思想よりも、現在に於ける情死者の心理状態、家庭の生活状

態と社會の境遇、上とに最も重き原因ありて、これに堪へ難き四圍の事情錯綜し、弱き感情の極、強き煩悶の極、竟に情死するの餘儀なきに至るもの多し、近來の情死者に、ど中流以上の者なく、凡そ情死せるもの借金に苦しませざるものなしとは、あたら戀愛の獻身的も亦お坐の覺めたる次第ならずや、

昔の心中には、にこりと笑うて寧ろ嬉しく死せるものあり、今日の情死には、べそく泣いて寧ろ苦しませられに死するもの多し、

情死の價値も下落せる哉、

甚だしきは相手の承知せざるを知りて、その寢息を窺ひ、その不意を覘ひ、これを冥途の道伴といふ無理心中あり、首尾よく行けばお慰みなれど、十中の八九、まんまと仕損じて警察に引ツ張らる、また相手の逆も應ぜざるを初めより觀念し、せめて白粉の匂ひなりと

も嗅ぎながら死にたいといふ、なさけない一人心中あり、若くは欺された怨恨のあまり餘所で首吊るよりはと面あて半分に一人心中する奴あり、多くは遊廓に於ける遊治郎の最後なれど、心中沙汰いよく下卑たりといふべし、

情死中、多少の憐れむべきものありとすれば、男女いづれか甚だしく位置の懸隔せるため階級制度の壓迫に堪へずして、到底その愛を全うする能はざるの結果、竟に餘儀なく死を求むるものと、また長男長女いづれも家族制度に束縛せられて父兄に割かるゝ悲哀の窮餘、他に道なくして竟に死するもの、まづ以上の二様にあり、加之も此等は實際いまだ世故に馴れずして意思單純の可憐なる若き男女に多し、姦婦姦夫の遁げ廻りし果に死するが如きは、情死中の最も惡むべき醜劣無恥の極なり、

そもく情死の必ず有すべき條件は、男女の合意に出づる事と、情死以前、既に通じて肉

交せる事、いまだ曾て一も精神上の愛と愛とに死するものなし、されど近來は女と女の情死するものあり、現に一年中その二月より六月まで五個月の間に六回の實例を示せり、この珍奇なる除外例の情死、もし一箇月に一回強づゝの割合を以て進むとすれば、情死の根抵さらに恐るべき急激の一大變調を加へ來りて、その侵潤し波及するところ實に寒心すべし、

來客

絶えず家に來客の多きは、その人の世に知られ世に用ひらるゝ證據にして、名譽といへば名譽の一なれど、あまり來客の多きに過ぎて、殆ど寸暇なく客責にせらるゝは、客商賣にあらざるかぎり、寧ろ一種の苦痛なり、

この苦痛を免れむとすれば、たゞ玄關拂ひの一手あるのみ、

されど玄關拂ひの無禮を思ひ、拂はるゝものゝ不平を察し、なるべく慇懃に迎へて應接すれば、徒らに無用の雑談か、出來もせぬ勝手な相談か、乃乃また屁理窟か、面の皮の厚い無理な注文の頼み以外、要領を得たる來訪の主意は殆ど十中の一二、その餘は悉く客責の苦痛なり、

加之も無用の雑談を聞かざれば、傲慢不遜なりとし、出來もせぬ勝手な相談を跳ね付ければ、無情冷酷なりとし、つまらない屁理窟も、多少の挨拶してやらすば、不足を唱へ不平を鳴らし、無理な注文の依頼を謝絶すれば、忽ち殘忍酷薄なりとす、いづれにしても客責に逢ふもの、助からぬ譯なり、

就中、助からぬは、出來ぬ相談と無理な注文の依頼にして、よほど手厳しく跳ね付けされ

ば、もはや相談に乗りしものと心得、その催促は借金取の居催促よりも鐵面皮に猛烈なり、また無理な注文これに浮と白い齒を露はせば、その人の身分も都合も辨へず、たゞ自己の用ばかりしてくれるものと心得、すう／＼しく無遠慮に付き纏ふこと悪女の深情に似たり、加之も事の成らざる時は成らざる理由と自己の無理を棚に上げて、すぐに愚癡を滾し不平を訴へ怨恨を陳べ、甚だしきは大事の物でも取られた如く言ひ觸らし饒舌り廻るものあり、これに比すれば、人の迷惑も構はず無用の雑談に長坐するものと、相手の暇を潰して屁理窟を並べるものとは、寧ろ罪なく害なき上客の部なり、蓋し實際の要用あるもの、談話は簡單にして要領を得べく、その来るを歓迎するもの、他にも歓迎せられて去るを急ぐべく、いづれにせよ客は言葉の妙きに用多く時間の短きに長き意味を含み、ぐ／＼尻の重い奴に到底ろくなものなし、

去るもの追はず来るもの防がざるは、寧ろ主義と意見の上より出でし古人の語にして、限なき今日無用の押掛け客は、勢ひ餘儀なく相應の工夫を設けて防がざるべからず、う／＼すれば人間その半生を他人のために奪はれ他人のために偷まる、この客責に逢ふもの、人を訪うて始めて人に不快を與へず、我また無用の時を費さず、無用の辯を弄せず、以て自他ともに遺憾なく圓滿の要領を得、但し親友と談じ知己と語るは、いかなる場合も人生無上の慰安にして、これがため多少の有用を殺ぐも寧ろ趣味の深きに取るところあり、さらに新來の客といへども、その人によりて一見舊識の如き談笑の快あり、相逢ふの遅きを歎じ相別るゝの早きを惜む、たゞ堪らぬは俗客の俗集なり、時を嫌はず無鐵砲に襲ひ來りて無遠慮に居坐るがため、或意味に於ては一種の家宅侵入罪といふべし、

夫婦喧嘩

我親友の京都に住めるものへ手紙を送る、

拜啓、時下ますます御安健大賀此事、さて昨日〇〇生歸京、わけて御近状を委曲に承知いたし候、會社の方も兄の力によりて基礎確實いよく發展の時節到来に達せるよし祝福の至りに候、

以下これより例の忌憚なき露骨漢として、多年の親友たる兄にいふべき事あり、まづ以て會社の發展は第一に祝福いたし候へども、近來は頻りと紅燈綠酒の間にも亦なか／＼御發展の勢ひ凄じき由、但し小生それを道學先生めいて彼是と申すほどの野暮でも無之、寧ろ元氣旺盛の一端として蔭ながら喜び候へども、その發展工合に聊か

妙な調子を帯びて、いはゆる内を外にせられし結果、細君との間に頗る穩かならぬ面倒を生じ候やう聞き及び候、實は〇〇生の歸京以前、既に細君よりも多少の面白からぬ一書まゐり居り候、全體どうする御料簡に候哉、

そも／＼あの細君を御執心の當時、失禮ながら兄の心理状態いかなりしぞ、あれを是非とも貰うてくれと、悪く申せば半狂氣の體にて夢が夢中に騒ぎ出し、その騒ぎを静める役廻りは友人中この小生一人にて引き受け、失戀の自殺動機は實際かゝる時に起るべきものと一時は全く危険を感じ候、加之も相手は才色兩全を以て四方八方より奪ひ合の競争物、兄は帝大を出たばかりのホヤ／＼、いまだ世間の一人前としては少々通用し難き折柄、あまり美男の方でもなく、おまけに有名素寒貧、この縁談を纏めるには其間に於ける小生の苦心慘愴、それを今更ら恩に著せるでは無之候、いよく

結婚の前日、兄は小生に對して何といはれしぞ、いふべき言葉もなく只その兩手を合して拜まれしにあらずや、

それほどの細君、そもく今日どこが氣に入りませぬ、いふ勿れ君、會社發展の餘儀なき交際上、つい聊か遊び過ぎたと、それは君あまりに月並の申分なり、遊び過ぎてても過ぎずとも小生は其事にあらず、いやしくも紳士として我妻に向ひ、いやなら出て行けとは何事に候ぞ、但し細君、兄に對して突然、だしぬけに嫌と申し候や、もし萬一さやうの不埒なる事を申せば、媒介者たる小生まづ兄よりも細君にいふべきこと御坐候へども、細君の氣質は小生よく存じ居り候、否、信じ居り候、たゞ交際上の單純なる藝妓遊びぐらゐで嫌の出るのといふ婦人では無之、また近來流行の喧しき婦人問題を荷き出して良人に突ツ掛かる性格でなし、これには

何か深い仔細あるべく、その仔細の種は正しく兄にあるべしと斷言するを憚らず候、願はくは君、我をして山紫水明以外、その地に急行せしめざらむことを、

願はくは兄よ、良人として妻に懺悔すべき秘密あらば寧ろ淡白に打明けて妻に謝るだけの雅量と親愛あらむことを、悪いことを悪い事として他人ならざる鼻アに謝れないやうな氣の小さい奴、競争激烈の社會に對して剛敵と引ツ組む餘力あるべきや、昔の川柳に曰く、女房に負けるものかと大だはけ、この俗語一句を學識ある今日の兄に呈す、

つまり君、あれなら何處へ出しても立派な細君ですぜ、あらためて能く御覽なさいよ、年を取るは夫婦お互の事、兎も角も何分の御返事、鶴首まち居り候、

この手紙に對して友人よりの返書、簡にして要を得たり、

朶雲拜誦、汗顔至極、早速妻に謝罪いたし候、併せて貴兄に謝罪いたし候、謝罪の理

由は近日上京、委細に自白可仕候、

我これを見るや、直に電報を發せり、

メデタイ

友人よりの返電、

イタミイル

我また更に細君へ一書を送れり、

良人をして謝罪せしめしは、妻として堪へ難き一切の過去を葬るに足る、今後この事に關して御手紙無用に御坐候、これからゴタつけば御勝手次第になさるべく候、御亭

主にも川柳一句を呈し候間、あなたにも一句さし上げ候、叱られて俯き振のよい女房、良人に對して妻の強きは生意氣な口返答せざるところに千萬無量の力あり、摺み合へば負けますネ、御身お大事になさるべく候、

細君よりの返事、文中の一節、

先日は見苦しき事おきかせ申し上げ今更ら恥かしく存じ候、また此度は有難き御教訓たゞく涙にて御うけ申し上げ候、御存じの通り只今にては兩親もなく一人の姉は昨年死亡いたし、さぞ御迷惑ながら世の中に親とも兄上とも思ひまゐらせ候、

これにて一切落著、めでたく夫婦喧嘩は治れり、されど實際これぐらゐの往復手紙にて無事に納まる夫婦喧嘩は、今日まづ尠かるべし、

放言録―夫婦喧嘩に關して

友人の不和に對して

我友人中、常に大猿も管ならざるものあり、我その雙方に對して同一の書を與ふ、

兩君足下、あまり見兼ねて一書を送る、

竹馬の友は骨肉に勝るといへど、竹馬の兩君こゝに猶いまだ解けず、ぐづぐづと常に雙方より下らない蔭文句を並べながら、たまぐ逢へば啞の如く睨み合うて無言に別る、果して何のためぞ、

我は兩君に對し、他の友人と等しく仲裁するものにあらず、寧ろ雙方の喧嘩ますぐ激しく大ならむ事を望む、

徒らに二の足を踏んで餘計な遠慮するがため、ぐづぐづと蔭で文句をいはざるべから

ず、空しく互に不快を忍び合うて妙に考へ込むがため、たまぐ逢うて啞の如くならざるべからず、蓋し我より見れば雙方ともに膽力なく氣概なく、あまりに意氣地なく卑怯未練なり、何ぞ出合次第に叩き合うて取ツ組まざる、

國と國との讓るべからざる結果は武力に訴へ、人と人との讓るべからざる最後は腕力に訴ふ、警察へも裁判所へも訴ふべき事件にあらざる兩君の今日、加之も既に議論の餘地なしとすれば、須らく決闘すべし、決闘を我國に禁ぜらるゝものとすれば、宜しく喧嘩すべし、もし喧嘩を危険なりとすれば、せめて怪我のない相撲を取るべし、もし相撲を取らざれば、腕押、脛押、枕引、手拭引、その他あらゆる種々の方法を考へて、いづれなりとも速かに勝敗を決すべし、

勝敗の決せざるがため、兩君さらに相下らずして睨み合ひ、おのゝ負けず劣らず意

放言録—友人の不和に對して

地を張り合ふ、いつまで立ツても同じ事なり、今更ら喧嘩の原因を穿鑿すれば水掛論なり、將來の友誼を説き人情を以て和解するが如きは既に後の祭なり、さりとして友人たるもの只これを見物して居ては申譯なし、我こゝに於て兩君に對し寧ろ二度と再び出來ざるほどの大喧嘩を望む、

そも／＼兩君は其郷里を同じうし其年齢を同じうし、其學校を同じうし其卒業を同じうして斯の如きは、よく／＼先天的の不和に生れたり、いはゆる俗にいふ蟲の好かぬ奴同士なり、これを一朝一夕に水魚の交あらしめむとするは他の友人にして、我は取らず、たゞ擱み合ひ叩き合の大喧嘩を以て勝敗を決せむとす、實は眼球の一個ぐらゐ突き潰し鼻の頭ぐらゐ喰ひ缺くほどの喧嘩せしめて後、始めて仲裁を試みむとす、喧嘩の場處は我これを選び我これに立合うて公平無私の行司たるべし、兩君、以て如何

とす、

この一書は兩君に對して、おの／＼一字一點の相違なし、加之も兩君にして躊躇逡巡し、我に否應の返事なしとすれば寧ろ進んで我より交りを絶つべし、氣の利いた喧嘩も出來ず打解けた仲直りも出來ずして、たゞ女の腐ツた如く陰でブツ／＼いふ人間を友達に持つは、癩病人を従弟に持つよりも我の恥なり、この一書を兩君に呈する最後の言とす、

この書を送りし數日の後、その一人は、自己の狹量を悔悟し、無條件を以て我に仲裁を頼みしが、その一人は、そのまゝ來らず、我これと竟に絶交せり、

我 知 足

放言録—我知足

我こゝに足るを知る、敢て足らざるを歎かず、
 されど我の足るを知るは、足るを知るべき點に於てのみ、足るを知らざる點また別にあり、
 我いまだ年少氣銳の頃、常に曰く、住めば魏々たる大廈高樓を起すべし、住まざれば天下
 に放浪して四方いたるところに轉寢すべしと、
 後年、實際の家を作るに當りては、その言の十分一を行ふ能はず、行ふ能はされど、住む
 に不自由なき現在の家を以て足れりとす、
 前後左右に廊下を通ぜし二階の十疊二室を以て書齋とし客間とし、これ以上を望まず、階
 下の十疊二室を子女七人に與へて、別に遊戯の廣き廊下を廻らし、これ以上を許さず、母
 は殊更ら四疊半を好み給ふが故これを新築し、妻は常に所謂茶の間を室として臺所に近
 く、玄關その他を除くの外は書生と下女の居所にして、一家二十人に足らざるもの寢るに

不足なく居るに不便なく、家は衛生のため三階の寸尺を以て二階建とし、用材は堅牢のた
 め悉く檜を以て耐震家屋とし、庭に泉石の奇なきも樹木鬱蒼として、鬱蒼の下また子女の
 遊戯に餘地あり、厠は階上階下いづれも世間よりは廣く作り、湯殿は家族の浴に狭からず
 以て堂々たる鐵骨石皮の洋館を羨まず、以て他人の魏々たる邸宅の宏莊を羨まず、以て閑
 雅なる別莊を羨まず、以て馬車を羨まず自動車も羨まず、こゝに蟠居して晏如たり、
 門を作る時、大工に命じて曰く、決して立派なるべからず、されど吝々すべからずと、我
 その繪圖面を製し、また塀を廻らす時、世間普通よりは六寸を低くせしむ、盜の入るを恐
 るゝものありしが、笑うて云ふ、世間普通より高くしても這入る盜賊は這入るべし、あま
 り丈夫に高く圍へる塀は監獄に似たり、あまり要害堅固に忍び返しの際きは、金持と間違
 はるゝ恐れあり却つて用心にならずと、

主人の自書は來客に無禮なりといへど、我は我主義として我室に四字の扁額を掲ぐ、
身貧心富

これに茶根譚の一文を附記す、

我貴而人奉之、奉此峩冠大帶也、我賤而人侮之、侮此布衣草履也、然

則非奉我、我胡爲喜、原非侮我、我胡爲怒、

鄰室に掲げて曰く、

菩薩心夜叉手

聊か以て我居家處世の一端とす、

母は今年七十二歳、二十一歳より未亡人となりて、貧苦の中に我を育て給ひし親一人子一人の母子なり、我の富まさるを更に憂ひ給はず、また我の奉養に足らざるを咎め給はず、

鏝鏢として心のまゝに市中郊外を散歩し、嬉々として朝夕に孫を愛し孫と戯れ給ふ、殆ど老の其身に至るを知らざるが如し、我に於て人生第一の幸福とす、

妻は壯健なる八人の子を産みし妻として、また唯命これ従ふ妻として、これ以上に求むるところなく満足せり、

男子四人、女子四人、其うちの男子一人は襁褓中より親友の養子となり、家にあるもの七人、長女長男ともに府立の第一中學と第一女學校に通ひ、四人は日々小學校に通ひ、ちよろ／＼歩き出せし三歳の女子一人、母に抱かれ祖母に抱かる、いづれも生來いまだ病めるものなし、

由來の下女は悉く我家より嫁し、今の下女は幾度も約束の期を重ねて出でず、乳母は既に乳の用なくして去らず、多年の忠僕に川越屋なるものあり、壯年の頃は盛に米屋を営み、

我また向島にありし時その米を購ひしが、人に欺かれて産を失ひ、不幸にして落魄の極、來り投ぜしもの、今年五十六、もはや我家に死せむとし我も生涯を我家に終らしめむとし口に馴れたる元の屋號を其まゝ呼んで川越屋といふ、朴訥にして純潔、容貌の原始的に奇なるのみならず、殆ど今人にあらざる天性の正直律義は、をり／＼當世の人と争うて太古の理窟を捏ね廻すの癖あり、何人を選ばず凡そ我家に久しく出入するもの、この川越屋の理窟詰めに逢はざるものなし、家族一時に聲をあげて笑ふ時は、必ず川越屋の眞面目なる滑稽より起る、門外一步いかに競争激烈の修羅場たるも、この川越屋によりて常に太平の象あり、蓋し我家の名物男とす、

新聞に雑誌に著書に演説に、いたるところ近來頻りに叫ばるゝ家庭圓滿の語、いかにしても我その不思議に堪へず、そも／＼家庭圓滿なるもの、さほどに喧しく騒ぐほどの價値ありや、さほどに難しきものなるや、

新舊思想の衝突なりとか、總ての上に過度時代なりとか、或は家族制度の如何にありとか乃至また結婚の不備にありとか、その他さまざまの理由より起るものとすれば、そんな糞面倒な理由さらに一點なき我家を以て誇るにあらず、これが一家の當然なりと心得もせず氣にも止めず、母も我も妻子も無事なり、

また衣食住に窮するを人間生存の恥辱とすれど、遺産相続税の多きを人生の權威ともせざる我には、強ひて子孫のため財を積むの用なく、たゞ親として子に對する教育資金を缺くべからずと思へるのみ、これを以て我また足れりとす、

朝は必ず五時以前に起き、二十年來こゝに二食の我は朝飯の世話なく、まづ掃除せる二階の廊下に出で、椅子に倚り、庭前の樹木と相對して茶を啜り、莖を吸ひ、大阪の二新聞と都